家庭雜誌

第五拾壹號

余をしてラィカルパスならしめよ　建國の基は一家の實業にあり、工業にあり

ミス、ユッヂヲース傳　異常の父と四人の母に仕へし彼女は文學界に名を轟しぬ

羅馬革命古譚　勇士一躍水に投じ、刺客の劍影暗中に閃き、妙齡の處女敵陣を脫す

嫁形氣　茶碗と茶碗の鉢合われて共の土に歸る

借財　すまじきものは貧乏すまじきものは借財

聯合艦隊司令長官海軍中將 伊東祐亨君題辭
松島艦乘組海軍少主計 竹内十次郎君作

征清海軍軍歌

全壹冊袖珍美本　正價參錢郵税二冊迄二錢

本書は竹内少主計官が、軍艦松島號に乘組み、身親しく戰鬪の衝に當り、而も威海衛陷落の日、即ち二月十七日を以て、艦中に認められし、實地目擊の活作にして、文章語壯絕眞に逼り、文士机上作出の比にあらず。且つ英名高き、伊東聯合艦隊司令長官は本書に題して、其の光輝を添へられたり。

本書拾册以上取纏め御注文の節は一册金貳錢五厘の割を以て差上可申候●郵税十册金八錢

日本昔噺第八編發刊

幸田露伴君序　鳥居忱君唱歌
巖谷漣山人編　藤島華僊密畫
（製本既成）

俵藤太

全壹冊洋裝大判　正價金五錢　郵税貳錢

龍神の弱を助けて、百足の强の挫き、朝鮮の衰を佐けて、蠻清の暴を懲らすと、何ばうよく似た話ならずや。第一第二第三の矢は、第一第二第三軍、其三度目の正直に、まんまと仕留めた曉には、山を欺く土產の珍寶、それにも增した分捕に、明治の藤太が功名は、皆樣とつくに御存じの、譬へも丁度近江路や、瀨田の唐橋いと長き、話を手輕なお伽艸紙、坊ちやんよい子じやねんねをしながら、ばァやに讀まして聞きたまへと、其爲め廣告、へイ左樣なら

日本昔噺 既刊目次

第壹編	桃太郎　富岡永洗密畫
第貳編	玉の井　小林永興密畫
第參編	猿蟹合戰　村田丹陵密畫
第四編	松山鏡　武内桂舟密畫
第五編	花咲爺　水野年方密畫
第六編	大江山　歌川國松密畫
第七編	舌切雀　三島蕉窓密畫

日本●●壹冊金五錢●全部拾貳冊前金五拾
昔噺●正價錢●郵税一冊貳錢宛
發兌元●東京日本橋區
本町三丁目

博文館

征清壯烈談

定價 十三錢
郵稅 四錢

本書に對する各新聞批評

○征清役の零聞逸事を收拾し以て此編を成す曩には日清軍記の著あり今は軍記に漏れたるものを蒐めて其及ばざる所を補はんとす彼此相須ち乃ち完璧となる國民忠烈の氣象を鼓動せしむる亦與かりて力なしとせんや(東京朝日)○著者の意は征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと、卷中載する所ろの紀事亦た慶長元和以前の逸聞を讀むに勝るものなからんや(日本)○征清の役起りてより我海陸將士の戰陣に臨みて勇戰奮鬪の間だに於ける美談佳話甚だ少きにあらず本書は則ち是れ等痛快壯烈の談話を悉く網羅せしもの、單に讀んで面白きのみならず一つには兵士の龜鑑となり一つには國民の元氣を皷舞するに於て寧ろ彼の乾燥無味なる長篇の戰爭記に優る事萬々ならん(中央)○著者は征清義戰の常山紀談を作らんとして本篇を著はせりと故あるかな其の叙する所の紀事片々尚且つ大和男兒が正氣にあらざるなきを其進んで國難に殉じ笑て敵刄に斃るゝの壯事快事筆々神躍り氣昂る(讀賣)○洵に是れ『征清義戰の常山紀談』、神洲男兒の本色を寫し出してなか〳〵に面白し(報知)○征清將士の義勇忠烈談なり、著者の意、征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと云ふ、書中記する所一として悲絶壯絶の談に非ざるなし、此書を讀で感奮興起せざる者は血なく涙なき無情動物也、(東京經濟雜誌)

臺灣

定價 拾錢
郵稅 二錢

臺灣地圖

定價一錢五厘
郵稅五枚迄 二錢

國民は其國土を知らざるべからず、臺灣は其一部已に占領せらる、其全部我有となるや旬日の後にあり、日本國民は其故鄉を知るが如く此新故鄉を知らざるべからず、而して之を知るは民友社出版の『臺灣』及び其『地圖』を讀むの外、良法あらん耶。最好の機會に最好の著とは此の謂也

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 有馬俊彥
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社（本社電話番號七十番）

明治廿八年四月十日發行

家庭雜誌第五拾壹號

目録

社説

史談

文藝

科學

家政

社交一斑

雜録

時事一斑



家庭雜誌第五拾壹號

(明治廿八年四月十日發兌)

社説

余をしてライカルガスならしめば

竹越與三郎

支那征伐は『大なる日本』を世界に立てゝ、從來の大日本を更らに一層『大なるもの』となさんがためなりとは今は何人も不同意なき事なるべし。去りながら已に『大なる日本』を立てたりとて、之れを維持するの實力なくては叶はぬ話也。

如何にせば之を維持し得べき乎。戰爭の終りたる後は兵隊の力のみを恃むべからず。戰爭一旦終らば之よりは平人の世の中也。平人の力もて『大なる日本』を維持せざるべからず。偖て平人と云ふ。其の平人は如何にして兵隊の建てたる『大なる日本』を維持すべき乎。六かしき語にて言へば、物質的膨脹等の語あれども、手短かに云へば、實業を盛にして貿易を廣くし、國の實力を充實せしむるの外あらず。而して此事たる、必しも、大商人、大資本家にあらずんば出來がたしと云ふにあらず。其實は皆な一人一人の指先きの働らきによりて、出來る事と知るべし。

日本は商業にて國を建て、世界各國の品物を取次して、口錢を取るべしと云ふものもあれども、今日の形勢にては迚も出來ぬ相談と知るべし。つまり、物を製造して之を賣る工業を以て國を建つるを覺悟して實業と云へば。つまり工業の事と心得ざるべからず。然るに此工業たる日本人の特有の長所にして、今後益々發達するの望あり。發達せしめざるべからざる必要あるものなれば、家庭の主人たるもの、今より豫じめ家庭に植

ゆるに、實業を尙ぶの風を以て、子弟をして實業の能力修練を得せしむる事を怠るべからず。是れ大きくしては國の爲め也。小さくして身の爲め家のため也。世には實業を以て卑しき事の樣に思ふものあり、大なるひが事也。中には、口に實業を唱ながらも偖て、其の息子娘を敎育し、または緣づくる時は、何か文學者か、政治家か、官吏か、軍人を目的とするを常とするもの多し。思はざるも甚しと云ふべし。世豈に自ら勞して、自ら生くるほど、尊とき事あらん耶。假令ひ其言ふ所、壯烈にして、鬼神をも動さんほどの勢ある愛國者なりとも、其衣食にして他に依賴し、良心にして獨立せざらんには、卑しむべきもの也。當人は此くは思はざるべし。されども衣食の獨立なくしては、如何なる達德の君子も、良心の獨立、六かしきものたるを覺悟せざるべからず。若しまた製造所にありて、顏を黑くして働らく所の工夫なりとも、俯仰天地に恥づる所あらば、彼は廟堂の上に橫行濶歩する大政治家よりも尊むべきもの也。此理見やすくして行ひがたきは、畢竟、從來の封建思想の脫せざるにあり。而して此の封建思想の全く崩るゝや、實に今後にあり。家庭の主人たるもの此の時務を觀察して、其子弟をして方向を誤らしめざる樣心がけざるべからず。

既に佛蘭西の如きは、國風は平民的ながらも、貴族の扶植したる流風遺韻、猶ほ存じて、社交に貴族の勢力あること、日本の貴族のとても敵しがたきほどにして、此點より云へば、貴族的と云はざるべからず。去れども其工業の盛なる也、實に上流社會の力にして、其年々英國に輸出する六七百萬圓の貨物は、多くは高等なる生活を營む者の家庭より製出したるものにして、賤民の手になりしものとては、極めて少なし。是れ佛國が世界第一等の工業國たる所以也。而して佛國が獨逸に負けて、猶ほ、覇を天下に稱するものは、其

兵備の力にあらずして實に此の工業の力也。

オランダの如きは、其王室たるもの、子弟に敎ゆるに各々手藝を以てし、親王、内親王等の尊號を取り去つて、唯だ一個の紳士、淑女たらしむるも、猶ほ世にありて面目ある生活を營むの力ありと云ふ。是れ獨り外國の例とのみ思ふべからず。我國二千五百年の歴史中、最も、偉大、英明の聞えある天智天皇の如きも、手藝を重んじ、農桑を勸め、自ら時計を製造し給へる位也。

或は云ふものあらん。我家は衣食足り、子弟獨立の準備あり。必しも工藝を子弟に敎へ、之によりて衣食せしむるの要なしと。去れども是もまたひが事也。人の運命は不定也。今日の王族は明日の乞食也。何時、其貧乏の運命の襲ひ來らざるを保せず。其盛なる時に、手藝を習ひ、且つ其習慣を有するは、非時の運命に抵抗するの力を備ふる也。且つ之のみならず。工業的敎育及び習慣は人をして堅實ならしめ、着實ならしめ、剛毅ならしめ自主自由ならしむるの益あり。道德を强むるの力も此内に存す。

少々の學問ある生悟りの人は曰はん。人が萬物の靈たるは其心にあり、心を使ふものは手を使ふよりも尊としと、去れども知らずや、人間の萬物の靈長たるは、其心と其手にあるによるものなるを。若し人間をして其屈伸自在なる手と指となからしめよ。人間は他の動物と異なる所なかるべし。若し此の手と指となからしめよ、人の精神もまた何の用をか爲さん。凡そ創世以來、人生の進歩は此手の力のみ。破壞も、計算も、建築も、命令も、契約も、刑罰も、糺問も放免も、戰鬪も、平和も、皆な此の手にして、手は心と共に、人間をして萬物の靈長たらしむる所以也。然らば手を使ふ工業は其の尊貴なるに於て、決して心を使ふものと異なる所あらざるや明白なりと申すべし。

故に余をして若しライカルガスならしめば、余は、全

國の子弟をして、皆な兵營に入りて三年兵事を習はしむると共に、全國の子女をして、皆な半ヶ年工業所に入りて手藝を學ばしむべし。去れども余はライカルガスならざるが爲に、之を家庭の主公に望まざるを得ざる也。

奇談

ミス、エッヂチースを紹介す

溯處子

先輩思軒居士「千人會」を譯せしより、ミスエッヂチースの名漸く讀詩社會の注意を惹き起せり。左の一篇は記者が同女史に就き、ある人々の質問に答へたるもの。零々たる斷片に過ぎずと雖、或は女史の一斑を讀書社會に紹介するに足らん乎。

記者識

英國文界の女星エッヂチース女史は、一千七百六十七年に生れ、名をマリヤと申候。

エッヂチース家は英國に起り、エリザベス時代に於ては、アイルランドに住み候ひし由、イングランド、ウェールス、アイルランドの血は、エッヂチースの家に於て相錯はり居り候由に候へども、最も較著なるはアイルランドの血に御座候由。

子は往々にして父の作に御座候。マリアの如きも亦其例の著しきものに候由。さればミスターエッヂチースを語るは、即ちマリヤを語るなりと紀傳者は申候。

ミスターエッヂチースは、希有の人の由に御座候、人は時としては渠を稱め、時としては渠を笑ふ由に候へども、渠に驚かされざるものはなき由に御座候。僅々四十分間にして地上に帶を正圓に曳くと、渠には容易なりし由に候。渠は猶ほ、時辰儀を製し、橋を架し、螺旋を拵へ、傳信機を發明し、輕氣球、インキ、石鹼を

造り、猶ほ其家の客間に精巧なる錠を持つたる戸を造り候處、客人達は再び開き得まじとの心配より、敢て其戸を閉ぢんと試むるものなかりし由に御座候、成程非常なる工夫者に御座候。

然して最も喫驚すべきは、渠は引繼き四人の妻を娶り、二十二人の子女を生しめたる事に御座候。

渠は初め十九歳にして、エラースと稱する日耳曼出の一處女と走り、彼に四人の子供を生ませ候て我が女史は即ち其一に御座候由。

渠は其妻子を率ひて佛國に遊び、里昂府に滯在したる間に、最初の妻を失ひ候より、再びホノラ女と呼ぶ、美にして艶なる婦人を娶り候由、然してマリアはいつも繼母の化裝部屋に窺きこんで、其の美しき姿に見とれたる由に御座候。

此頃よりミスターエッヂヲースは、其の美しき細君と協力して、小供に讀ませる、小冊子を綴り初め候、是は今日に於ては幾多の文豪を吸集しても、猶ほ足らざる一大國と膨脹致し候へども、當時に於ては、踘ほどの、領分も有せざりしものに候由にて、當時斯かる微々たる事業の爲に、其の全力を靖献するは、即ち此の異常漢の先見なりと存せられ候。

繼母と繼子の間の東洋的ならざりしは、最も幸福なる結果を一家の上、別してマリアの上に與へ候。繼母は面の如く美なる心を以て、マリヤを其愛に居らせ、渠等が新事業を初めしより、彼を讀者の一として、扱ひ候ひしが、始めてマリヤの天才を識認したるは、取も直さず此の繼母にて候由、「この子は私と年こそ違へ、外の事は私と全く同じだ」と繼母に叫ばしめたるは、マリヤが未た十二の齡にてありつる由。

美なる、慈愛なりし繼母は、一千七百八十年にエッヂヲースの家庭を捐てたるは、マリヤが十三歳の年に候、繼母の死後、彼の父は渠及び其亡妻の如何ばかり彼に

望を屬せしやを語り、「雅量」の題を科して、物語を綴らしめ候、然して父は猶ほ、其物語は筋を正史若くは稗史より取る事、一週間にして成就すべき事を命じ候由、斯くて文成り、亡繼母の兄弟なる人に評を求められ候處、其人の評に、筋と云ひ、筆といひ、微妙も書かれたり、惜しい哉、肝心な「雅量」が見えぬ」と御座候て、「雅量が見えぬ」の一語、其後此家庭の通り言葉と相成候由。

是れがエッヂチース家に於て異常なる父が、異常なる子を作る、第一着手に御座候。

ミスターエッヂチースは後妻ホノラの遺言に依つて其妹エリザベスを第三の妻に娶り候由、然して又エリザベスの美なる事ホノラに讓らずと之あり候。エッヂテース君はあやかりたき程艶福なる人に御坐候。

一千七百八十二年女史が十五歳の時、エッヂチースー家は愛蘭の故國に歸り候、愛蘭に於けるエッヂチース家は、多少の地面と小作人を所持候ひしが、ミスターエッヂチースは他に支配人を傭はず、内外の經濟を親らし、マリヤをして己を幇助せしめ候ひしかば、マリヤは愛蘭人種の弱くて強く、滑稽で沈欝なる然も愛すべき特質を研究するの機會を得候由。

歸鄕、是は實に此天才の生涯に於ける一大紀元に御坐候。即ち彼をして愛蘭の人種に風俗に觸れしめたるのみにあらず、彼の父をして、科程的に彼を修練するの勞を取らしめしは、是時以後にて、是迄は隨時の試業の外には、重に學校に托され居り候、今や愈故鄕に安堵せしより、ミスターエッヂチースは其の所有地内の行政と、其十を以て數ふる小兒の敎育に時間を分ち、別してマリヤの作文學に就ては、一種の熱心と興味を以て從事し、觀察の仕方、文章の組立方を以て彼を肄し、彼に其の觀る所を語らしめて、其の未だ及ばざる所を摘發し、其の書く所を示さしめて、親から筆を

加ふるなど非常の面倒を取り候由。
マリヤ、エッヂチースは斯の如くして其父に作られ、而して其の全集も唯「カッスル、ラックレント」の一篇を除くの外は、皆其父の意見に由つて其の原案より變へられたるもの、されば女史は凡てを其處に歸し候由。

然れ共女史の紀傳者は孰れも是に至つて一疑問を提起し候。即ち文學上の價値より觀察する時、乃父の干涉の得失如何と云ふ一事に御坐候、「ミスターエッヂチースは理屈の人なり、村夫子的なる人なるが故に、女史が全集を一貫する所の教訓的趣味は、概して乃父の干涉に謝すべしと雖、其の時として滑稽を欠き、自然を欠き、全躰に於て、娯樂的趣味の多くを欠きしは、即ち干涉の弊ならざるを得ず、詮する所、得失を償はず」と樣に女史の紀傳者は、概して嘆息いたし候。

「奇なる哉最も巧に性格の顯はれたるものは、最も少なく性格は注意したるものなる事や。余が今日まで聞きし所にては「カッスル、ハックレント」中の性格は、余が嘗て描きたる愛蘭人の性格よりも、數等高きものとかや、然して是等の性格は、不思議にも一個の面倒をも、哲理的分類をも要せざりし所のものなり。而して其の成るや一回の更正をも用ひず、原稿の儘直ちに活版に投ぜられたるものなり。他の著述に至つては、皆大面倒を以て修正せられ、改作せられ、淨書せられ、然る後始めて稿を脱したるものなり」と。是れ其の傑作「カッスルハックレント」及び他の全集に對して、彼自身告白したる所に御座候。されば女史の讀書は皆女史が、乃父の干涉の下に書きし所のものを、盡く其天才の下に書かしめしならば、彼が文界の位地、今あるよりも數等高きを得べかりしにと、嘆惜いたし居申候。

マリヤ、エッヂチースは、歐洲の文界に於て、田園小說の開山と稱され居候由。世界の寵兒と稱せらるゝサー

ヲーターースコットは、其ウエバーレーの叙に於て、ミスエッヂヲースが愛蘭及び愛蘭農夫の爲に、爲せし所のものが、蘇格蘭及び其農夫に對しても爲されて欲しいものだと云ふとを告白し、魯の大家ツルゲチーフは、其の少き時、其長兄が「愛蘭物語」の翻譯を讀むを聞き、異日ミッスエッヂヲースが愛蘭の爲に爲せし所のものを、魯西亞の爲に爲すべしとの志望を起したりと申し傳へ候。之を見ても、女史の田園小説が如何に當時の文豪を感化したるかを觀るに足るべく候。

女史は中年、愛蘭の一揆、及び愛蘭を襲撃したる佛國革命軍の爲に脅かされたると有之候へ共、左程其の文學生涯に影響せざりしかば、省畧致候。

女史の晩年に於て、最も著しき出來事は、女史とスコットとの交際に御座候。是より先き其の匿名のウエバレー出るや、女史は之れを中てたるもの丶一人と申し候丶、即ち當時既に幾分の心交はありつるものと考へられ候。一千八百二十三年、女史が始めてスコットを訪ひし時は、女史は既に五十六歳好い加減な祖母樣にて御座候由、其時スコットは女史に其細君及び子供を引合せ、自個の犬、細君の犬を示し、エチンボーの山川、舊跡、ハイランドの美なる景色に案内せし由、其後、二年を隔て丶スコット自身、又其子供達を具して愛蘭に來り、エッヂヲース家を見舞ひ、女史の訪問に答へ候由に御坐候。

爾後交際の終まで渝らず候て、スコットが例の秘密加盟の出版會社、丸潰れの時、端なく女史を泣せ候由。」

女史は容貌颺らざる方と見え、自分ほど見醜き女はなしと自から申され居候由、然れども其知己は、色々の理由を以て女史の器量を辨護いたし候。

女史の生涯は遂に戀愛の歴史なくして能く了しり乎。是れ、我、人の待ち設けたる疑問に御坐候。紀傳家の申す處に由れば、一千八百三年、女史が三十六の時、

其の家族を伴ひて再び佛國に遊び、巴理に滯在せし間に、瑞典の人エデルクランツ、彼に贈るに結納を以てし候處、女史は、深く其の愛を受納し候へども、既に乃父に獻けし身なればとて、嫁することをば拒み候由に御坐候。然して猶ほ女史が三人目の繼母、斯の如く記し候。爾後彼は雜誌新聞上に端なく記されし渠の名、若くばスヰランの文字に接してすらも、恍惚として心を失ひしと。然して瑞典紳士も亦一生無妻にて暮し候由、人生意氣に感ずとは、是等を云ふものにやらん。

最も美しきは、其父に獻身せし事と女史が四人の母に一樣に仕へたる事に御坐候、最後の、即ち三人目の繼母は、彼自身よりは年少かりし由に候へども、猶ほ能く母として仕へ、その八十二歳にして死する時は、嬰兒の如く他の腕に縋りて瞑し候由。

女史が長き生涯の間、人の爲にしたる善行、數ふるには多きに過ぎ候嘗て愛蘭の飢饉場裡に天使たりし、一事を以て其の平生を想見する外、此處には紙數を餘さず候。

女史の時代は、近世史上最も著明なる時代に御坐候。即ち政治上に於ては、米國獨立の戰戰はれ、佛國は革命せられ、奴隷を解放せられ、歐洲各國到る處社會黨の壞裂四出したる時代、文學上に於てはヲルヅヲルス、バーンス、バイロン、スコットに依つて、輝かされたる時代に御坐候。女史は乃父の蔭に由つて、盡く當時の政治家と交際し、自ら立てる境遇よりして、スコット以下の文豪と相識り、有名なるダーウヰンの祖父ダーウヰン以下、當時有數の諸學士と往來し、女史自身は大陸文界に一生面を截開して、生前に其成効を見候。人生の宴會に於ける、幸福なる賓客なりけりとは其の長き生涯に對する、臨終の際の自評に御坐候。

有名なる批評家、マコーレー氏は、ミスエヂヲースを以て、彼の時代に於ける、歐洲第二の婦人に數へ候。

（マダム、デ、スタイルを第一に置き）。作られたる人は、自ら作れる人に及ばず。是のみ遺憾千萬に御坐候。

羅馬革命古譚

あ、ひ、編

三、ホレシアスコックレスの奮闘

さるほどに、タルクイニアス王はいかにもして再び其王位を回復せんものと四隣の兵威をかり、志きりにロマの都を攻撃しけるが、いつも意の如くならずして、もろくもうち破られければ、さすがの逆王も其志くぢけたりけむ、其後は全くエトラスカンの王ポルセンナに萬事をうちまかせける。

茲に於てポルセンナ王兵を四疆に募り、騎士歩兵各数萬の大軍を統轄し、親から之を指揮して、破竹の勢、すさまじくロマの都にせめよせぬ。

タイバル河の流れ、滔々として、凄まじきと限りなし。之れに渡せる一木橋、これぞロマの都に通ずる唯一の要路なりけるか、ロマ人はこゝを越えて陣營をしき、敵の軍勢、見事にうちとめんとて待かまへたり。間もなく敵は噪然として、こゝ咫尺におしよせしが、その勢の鋭き、見るからにさすがのロマ人も忽ち氣勢を落し、日頃の勇氣に似もやらず、吾れ先にと隊伍みだして、逃足いと急なり。

あはれなるこの敗走のさまに引きかへて、逃るはにげよ、吾れはいかでか一歩も動くべき、勢に乗つてよせくる敵の奴原、何をかなさむ、きたれロマ男兒の膽玉、見せてくれんと、單身孤劍の鞘うち拂ひて、橋頭に、つん立つたる一人の勇者ありけり。その名をホレシアスと呼びけるが、片目なるを以て片目コックレスと綽名されけり。その側に殘りたるラシアス及びハルミニアスの二人も亦只ならぬ剛の者とぞ思はれける。

それと聞きし敵の者共は一時にドッと高笑し、命志らずの愚かものよと口々に罵りあひ、アウナス、セイアス、ピカスなどいふ剽悍決死の將士を先鋒として、たゞ一打と三人目がけて、切き込みしが、何ぞ圖らむ、一人は忽ち車がへし、續いてかゝるを燕かへし、尙ほも殘るを將棊倒し。これはと驚く敵を物ともせず、三人はつッ立つたる儘、一步も動かず、雲霞の如き大軍を雙手に引受け、手當り次第にうち薙きければ、さしも勢こんで寄せきたりし、敵軍もみる〳〵隊伍を亂だし、赤心こめし大力凪に草木の如くうち靡き、只茫然とあきるゝばかりにて、志ばしは手向ふものもあらざりけり。

折からルウナ侯アスタル、遙か後軍の方より、このさまを見て、張合ありとや思ひけむ、己が精鋭の手兵を從へ進みいでけるが、剛然たる三人に向ひ凄じき微笑をもらし、戰慄せる從者をはげまし、見よ、猿の子の如とき猛惡なるロマ人も吾が一擊に微塵とならむ、者共續けと、大音聲あげ、ボレシアス目掛けて打てかゝるに、きたりや應と、身を轉はす途端、甲胄をそげし劍の切先、端なく股のあたりを傷けたれば、忽ち流るゝ紅ひの血しほに、敵軍再び色めきあへぬ。されどコックレスは寸分屈せず、傷けられし猛獅の一入勢ひはげしく、切りかへし、突きはらひ、戰ふと暫くにして、アスタス遂にかなはず、アッと倒ほるゝ喉元グッと突きさし、見よ、よき珍客よ、此方にきたれ、來りてロマ人が饗應を受けずやなど、罵り笑へど誰れひとり應ずるものはなかりけり。

卑怯にも敵に背をみせしロマ人等は、コックレスがこの有樣に、再びその英氣を復し返りきたりて、兎も角も一時の急を凌がんにはこの橋を中斷するに若かじと、始めて心付き、後の方より、うち破り初めければコックレスを賴みに戰ひゐたりし二人の者は尙ほも命

の惜しかりけむ、橋の全く落ちぬうちにと此方の岸に退りけり。されどコツクレスは獨り元の塲所を去らず、いよ〳〵勇奮死守して止まず、橋の全く落ちて敵の一歩も進む能はずなるまでは、少しも撓まず揉み合ひける。

かくて橋の全く絶れけるとき、コツクレス身を轉はし、ロマの市中遙かに見渡すと見えしが、オ、タイバル、父なるタイバルよ！我は爾に此身神を拜すと言ひしも果てず忽然一蹶、あはれや底知られぬタイバル河の水烟ときえうせしかと思ふ程もなく、浮みつ、沈みつ、敵の矢玉と怒かれる激流をくゞりて泳く其さま勇ましく、難なく此方の岸につきたりければ、味方の者はいふも更なり、敵の者共まで一齊に掌を拍ちてあはれ剛の者よと賞嘆の聲志ばしは鳴も止まざりけり。

コツクレスが單身奮鬪したるため、ロマは全く殘虐なる攻擊者の手よりまぬかれ、歡呼抃舞しつ、人々其堵に安しける。

其後コツクレスは多くの領地を與へられ、餘命を樂しく送りけるが、死後タイバル河畔、水の流れ淸くして、絶えざるの處、小高き丘陵の上、苔むす紀念碑の下に、永くその功績を傳へられけるとなむ。

It stand in the Comitius,
Plain for all folk to Aee;
Horatins in his harness,
And underneath is written
In letters all of jold,
How valiautly he kept the bridge
In tha brave days of old.

Trans: by Macauly.

四、義少年ミユシアスの剛膽

その後、間もなくロマは復びポルセンナ王の侵略に困まされけるが、之に引きつゞき國中大饑饉にて、富め

るも貧しきも、一方ならぬ悲慘のさまに陷りけり。
こゝに貴族の一子にてミユシアスカラボラといへる一少年、その悲慘のさまに憤慨やみがたく、如何にもして暴王ポルセンナをうち滅し、人民の疾苦を救はんものと、日夜思をこらし、竊かに計略をめぐらしけるが、元より一少年の事なれば、同志徒黨を集めて、一大事を企てんともかなはず、よし謀るに友はあるとも事の秘密を洩らす憂ひあれば誰れにも口外せず、單身にて飽くまでも成し遂げんものと健氣にも既に覺悟をぞ定めける。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

夜深ふして、星明かに、ジヤニカルアス山をすぎわたる風の、時々草露を拂ふて番兵が足音を吹きよする外は、四隣寂として一語なく、天も地も眠りにゆきしと思はるゝ眞夜中ごろ、何者ならむ、エトラスカンの陣營近く忍びきたり、守備嚴重なる軍門を、如何にしてかくゝりぬけ、營中至奥の場所に入り込み、かすかに燈光をもらす戸のすき間より窺ひ見て、ニツコリ笑みし一少年あり。右手にきらめくすさまじき光は、闇夜を迷ふ電光か、悲慘を訴ふる亡鬼なるか。

燈火ほのくらき室の裡には、ポルセンナ王を初めとし、そが股肱の重臣三四人卓を繞りて、何事か志きりに、軍議を凝らし居たりけるが、戸外遽かに霹靂の如き響きせしと思ふ間もなく、重臣の一人儀表眏麗なるが、ドーと音して忽ち床上に倒れぬ。あなやと驚くその時早く、鮮血淋漓たる短劒を提げて、猛然として室の中央につッ立ちしは、これぞまがひもなき少年ミユシアスなりける。

ポルセンナ王はこの不意なる狂暴の擧動に、志ばしはあきれてゐたりしが、やがて劇だしく侍臣を呼びて、ミユシアスを執りおさへしめぬ。ミユシアスは最早己が志は成し遂げたりと思ひけん、一言の抗みもなく、

自若として侍臣等の爲すにまかせぬ。

ミユシアスが縛につきたる後、ポルセンナ王之を前に引出さしめ、爾何者なれば、一少年の身を以て、深夜營中に忍び、あまつさへ吾が重臣にこの狼籍は何事ぞと、意氣せはしく讓めといへば、ミユシアスの顏色忽ち變じて烈火の如く、エヽさては、仕損じたるか、吾れは汝が無道なる腸を刺さんとこそは思ひたれ、要もなき汝か漫臣を弑さんとは思はざりしよ、エヽ殘念、口惜しと、眼に血を濺ぎ、前齒ミリ〳〵嚙みしばれば、王いたく怒りて、直ちに侍臣に命じて、薪材を運ばしめ、之に油を濺がせ火を點しければ、熖々たる猛火、忽ち爐中におどりて、燃えうつる勢ものすごし。

ミユシアスこの樣を見て、心得たり、吾を火刑に處せん積りよな、よし、さもあらば、ロマ男兒の心膽みせくれんと自から爐邊に歩み、右手を火中につき出し、熖々たる烈火のうち、肉焦げ、脂流れて、肢骨悉く燃えはつるまで泰然自若としてありければ、王このさまに、驚嘆し、直ちにその縛をとき、之を縱ち、言葉を柔らげて、吾れ爾が剛膽の心に愛でゝ、一命をゆるし遣さんほどに、ロマの內情洩れなく密告せよといふ、ミユシアス少しも躊躇せず、三百餘人のロマ義少年は吾が如き企てを以て、日夜爾を弑さんと窺ひ居るなりと答へければ、それときゝし、ポルセンナ王は一時の虛言とも覺らず、さてはかゝる剛膽無雙の少年輩が日毎に吾れを窺ひをるとは、さても危きことなり、と心おそろしく感じて、其翌直ちに使をロマに遣はし、一先づ和議を結びたりと云ふ。

五、クロエリアの救兒

ロマ人はポルセンナ王に和睦の證として、數多の人質を送りけるが、そが中に身分貴き、クロエリアと呼ぶ妙齡の處女ありけり。

クロエリアこれまで、深窓のうちに、數多き侍女等に、

かしづかれ、何に不自由なくおひたちければ、敵の陣中に、物凄じく、唯ひとり、儘ならぬ日を送ること、如何にも忍びがたく、殊に父母兄妹のなつかしくて、懐郷の念たへがたけれど、元より守備嚴重にして、常に數人の衛士に番せられたれば、鼠だに通ふべきすき間なく、逃れ出てんとなど到底出來べくもあらざりけり。

松ふく風の己がまに〳〵、彼方此方にゆきこうを見ては、その身の不自由をかこち。すみ馴れし故郷の空にさまよふ雲の行衛もなつかしく。ふけゆく夜半に、一こゑ、二こゑ鳴く雁がねのいよ〳〵なつかしく、吾身も鳥ならば、かゝる憂き目は見まじきを、雲とならばや、風と吹かばやと千々に亂たるクロエリアが懐郷の念、涙だのかはく暇もなからむ。

斯くて過ぐること一二ヶ月、今日しも某神の祝日なればとて、將士衛兵先きを爭ふて暴飲しはては前後も知らず熟睡しければ、時こそよけれと、クロエリアは難なく陣營を逃がれ出で、息まきつゝやう〳〵タイベル河に達しけるが、幸ひ水量も大に減じゐたりければ、身を投じ、手弱き、優腕に泳ぎ〳〵て、遂に向ふの岸に達し、なつかしき家郷にぞ歸りける。

ロマ人之を聞きて、女に似合しからぬ剛膽の氣、誰れひとり賞賛せぬはなかりしが、之を共にいたく彼女が不遜の罪を戒しめポルセンナ王に丁寧なる謝議を宣へて、再びクロエリアを其陣營に送りかへしぬ。王はいたく、ロマ人が其約束を守る信義の心に感じ、他の多く、人質と共に、復たクロエリアをも赦し、悉くその本國に送りかへし、已も亦陣營を解き、兵馬を率ひて遠くその本國に歸へりぬ。而して爾後復たロマの市民を窘しむることなかりしとなん。　(完)

文藝

嫁形氣

嵯峨の山人

茶碗と茶碗の鉢合
われて昔の土に歸り
嫁と姑の角突合
もつれて嫁里へ歸る事

二

二三日前に降た雪がまだ消きらず、垣の根方木の根元、池の邊の小芝影などにむら〳〵命を保て居たのを、昨日の寒風が氷らせて、翫具のピラミイドを作ッたから、さあ今朝の寒さといふては、ほんに〳〵近年にない寒さですこと。

然し嫁の身では朝臥をしても居られませんわ、添乳して居る我子の千代が目を覺さぬ樣、窃伏臥を拔出さうとして、其すや〳〵とねむッて居る、ぽちや〳〵と肥た顔が、微塵世の塵を止めず、神の樣な淸き氣高さを現はして居るに、覺えず見惚て莞爾とし、さも愛らし氣に頰附をして、そッと伏臥を立出ました。

手ばしこく衣服を着替て、亂れた鬢の後毛をざッとかき擧るも、女のたしなみでせう歟？　引窓を開けば、天は少女のキッスの如く淸く、きら〳〵と目に入來りながら、さッと吹降す雪風の寒さ、宛然頸元から水をかけられる樣、其に附ても會社の用で、此頃旅行して居る夫の身の案じられるのは女の情。

また母上樣が、御目を覺したらやかましからうで、早く焚附て、と思ッて、三四本の薪を釜の下にさしくべコッパをへし折て其前に並べ、之にマッチを摺て火を焚附れば、ぱッと燃上る火に、煙は蛇の如く立昇ッて、引窓を出づるや否、風に靡いて消へてゆく、其行末は何處でせう？

コッパが燃きッて後は、火勢衰へて薪には附かず、只ぷす〳〵とぷすぷッて居る丹、え丶まだ此生薪の燃憎さ、ほんにじれッたいと言ては。

更にコッパをへし折てさしくぷれば、之でやうやう薪にも附た樣子、一寸手を火にさしかざして、其手で又冷たくなッた頰を二三遍こすれば、雪よりも白き頰の、朧々と稍紅を帶て、櫻色になッた美しさ、見る人の無のが哀です。

扨かきがねを外して、水口の戸を開やうとすれば、是は又何事、氷附て居て開ればこそ、斯いふ事も有らう歟、と昨夕敷居の溝に溢した水を、あれ程雑巾で能拭て置たのに、其に此樣に氷て仕舞ふとは、ほんに〳〵憎らしいッてはない。

呟きながら雪の如く白く、綿の如く柔かな拳を擧て、戸の根方を二ッ三ッ打てば、少し動いた樣な氣がするので、之に全身の力を込めて引開くれば、がら〳〵といふ音がして、何なく戸は開きました。見れば溝は粉のふいた樣に氷て居ます。

是だもの、開なかッた筈だと思ひながら、手桶を提て外へ出づれば、さッと吹來る風の寒さ、きれる剃刀で宛然頰を剃で持てゆかれる樣、地も氷て居れば、歩く度石の樣な音を立て居ます。

仰げば廿六日の有明は、宛然薄衣をかついだ白衣の天女が、野梅一枝の花をかざして、雪中に立て居る如く、杉の梢に白々と懸て居る美しさ、春月の如き艶麗な點こそないが、清冽潔白といふ點は、却て冬の有明に有ませう歟。

車井戸の下に立寄れば、誰が家の四斗樽歟、汲込まれた水は鏡の如く、井戸流も一面に氷て居て、下駄の蹈場も危なさうです、汲上た水からは蒸發氣が、冷渡ッた空氣の中に白々と立昇るのも寒さうだのに、折から蜆よういと賣に來た賤の子の聲の、寒さにふるへて居

るも哀で有ます。

左右の手に手桶をさげて我家に歸り、其水を茶釜に汲



入れて後、倘其此と臺所の用をして居る中、飯も吹上るに、火を引て茶釜の下にくべ替、焚落は堅炭に添へて巨燵に入れる中も、まだお湯も湧ねば、母上樣が起てくれねば宜が、と其計が彼女の心配でせう。

折から千代太が目を覺して、母樣母樣と呼び立るに、急はし氣にかけ入て見れば、千代太はしだらなき寢衣のまゝ、床の上へ起上て、ねむさうな、脹ぼッたさうな、如何にも愛らしい目附をしながら、兩袖で目をこすッて居たが、母を見るより傍にすり寄るを、抱へ寄れば、其まゝ懷へ手をさし込んで、少し甘へながら乳をさぐらうとするいたいけ盛、親の身には如何程愛らしいでせう

何だねへお前、其樣所へ手を入れて、さあ〳〵母樣は御用が有ます。不可ませんよ。さあ立ちして、御着物を着替て、と言はれて耻し氣に莞爾としながら、さも大切らしく母の乳を、襟で蓋をする樣に押かくす、其風はとんと大事な寶でも仕舞ふ躰の樣です

母は手ばしこく衣服を着替させて、其煙る樣なぽちや〳〵として頰を痛い程キッスして、さあ今朝は寒いからお巨燵へ這入てお居で、と巨燵の中へ入れてやれば、千代太はさも腕白らしく仰向に臥ころびながら、母樣、あの御本取ておくれ、太閤記、と其から義經の、其か

ら桃太郎のも、頼光頼光のも。あいよと言ッて、其を急はしく取てやれば、千代太は本を見ながらおとなしくして居ます。

折から姑が目を覺したと見えて、奥でごそ〳〵と着物を着改る音がして居ます。急でかけて往て見れば果して其。恰度今湧て來た湯を取て緣側へ廻はせば、其でも姑は倘何が氣に入らぬ歟、不機嫌相な顏をして、小言の種をと探す樣に、目くじりを立ながら四方を見廻はし。緣に出て貌を洗ふ。

嫁は其間に炭を火鉢に繼ぎ、焚落を之に入れて起る樣になし、茶釜の湯を鐵瓶へ取て之に繼ぐ、扨其後は汁を煮る番だが、下女なき家庭の嫁の身は、如何に急がしい事で有ませう、恰も時計のセコンドの如く、ぐる〳〵廻ッて居なければなりません。

おやまだお香物も出して來なくッては、と汁鍋を竈にかけて置ながら、急はしく水下駄を突かけて物置へゆき、澤菴の香物を右の手にさげて、又急はしく歸て來れば、是はまあ如何したものでせう、姑は竈の前へ屈みながら、今迄盛んに燃えて居た薪を、火箸で頻りに叩き消して居ます。餘りの事に呆れ果て、後にすッくりと立たまゝ、物をも言はず、じッと姑のする業を眺めて居る、と姑は少し耳が遠いので、嫁の歸ッたのには氣の附もせず、好氣な貌をして、倘火箸で火を消して居ます。竈の火よりは煩惱の火を、消したら餘程宜のでせうに。

母上樣何をなさいますの？　言はれて初て心着、後をふり返ッて喫驚して、流石に耻て歟貌を眞赤にしたが其でも口はへらず、今薪が逆樣にくばッて居たから、其で直して居たのさ。嫁は餘りにおかしくも腹立しくもあれば、是も其まゝ口はつぐんで居ず、おやおや薪に逆樣だの、逆さでないのといふものが有ますかねへ、初て私は聞きましたよ。

此一言、姑には胸に釘です、其言ふ所は道理なれば、之を言破る論法はないが、然し其言方が氣に食はぬ、私は初て聞ましたよ、嘲る樣な其調子、其言草が氣に食はぬ、たとひ何と言はれても、姑のいふ事は、御無理御道理と聞て居れば宜に、其を口ばしの青い分際で、六十七十の年寄をやり込め、其で宜氣になッて居るとは憎い生根だ、と姑もやッきとなッて。

おや、お前はよく口返答をおしだね、其はお前が如何樣利口發明か知らないが、まだお前にやりこまれて、だまッて引込む樣な老耄はしませんよ、ハイお前はまだ此家へ來てから五六年、私はもう四五十年も居ります、ハイ世の中の事には此でもお前よりは明るい積りさ、以來もある事、口答はして貰ひますまい。と強く言はれては、嫁の身の返すべき言葉もなければ、みす〳〵無理な事をいふとは思ひながらも、仕方なく〳〵また竈の下を焚附る、哀は嫁の身の上です。（以下嗣出）

初戀の記

森愛軒

余は愛の爲めには生き、又は死し得可きなり。寧ろ余は世界を抱きて生きんよりも、谷間に笑へる姫百合の一房を抱きて死せん事を願ふなり。　愛子

其一

余は生れながらにして感情の子たりしなり、自個の感情と云ふ小き王國の下に護られ、此帝國の司配の下には喜んで死し得べしと思ひ、且つ此可愛らしき討死は、愛の世界に於て名譽ある紀念碑に刻まれ得可しと信じたるなり。余は斯く信じつゝ人生の鐵路に上り來れり。

余幼なき十六年の生涯は田園に於て過されければ、經歷より云も自然の懷に生長したる者なり。されば余は生れつきのまゝに老ひ立ち、感情激き性質の益々鋭くなり行くにつけ、「彼は氣狂に非ずや」と怪しまれし

は珍しからぬどなりき。自然の腕白見たる余は、凡ての事に出會ふ毎に、自個の感情と云ふ手引に誘はれて、最も危險なる淵にのぞみ、最も恐るべき身の毛もよだつ程の嶮崖に余自身を看出すとありしかども、斯る時とて余は逡巡するとを好まず、其淵に飛び入り、其嶮崖を飛び降りて懼るゝ所なかりしが、辛ふじて今日まで髮一筋だに失はざりしは、不思議なる幸と云ふべし。

余が五六年前の有樣を回顧すれば、面白くも亦痴駭なるとのみ多く、殆ど人に嗤はれたる如く「氣狂ひにてはあらざるや」と自らも思ふ程の事あるなり。或る時は杖を携へて山に菌をあさりて走り暮す時に、フト茅萱の下をチョロ〳〵流るゝ小川の行末のいと心細く忍ばれて、崖の上に腰うちかけ、日の暮るをも知らで水の行方を見つめしともあり。又は友だちと春の遊山に出掛し時、高き山の岩角よりムラ〳〵と虎の如く、獅子の如くむらがり出る浮雲の如何になり行くらんと氣遣ひて友に離れ、小徑に迷ひ入るをも知らず、眺め暮すことは數々なりき。

或る時は隣村の助六が娘お玉は、吉三郎と淺からぬ契をむすび、離れぬ愛着となり、親の説諭（無理非道なる壓制の）も聞かで、名も恐ろしき魔魅池に身を投げけりなど云ふ、悲しくもあはれなる話をあざけり半分に頬澎らして話し出す村老を聞く毎に胸も裂かるゝ思し、涙を見せじとウツムキながら、猶も彼の可憐なる天の使の如き二人の愛の靈は何地に迷ふらんと、一里許もあらんに彼等の身を投げしと云ふ池の汀を幾回となく回りありき、あはれなる祈を戀の神に捧げて二人の清き人々を慰めんとせし事もありき。又は向ひの雪子孃の最愛なる山雀の死したればとて、今日しも手厚き葬式ありと聞き、雪子孃と共に手を携へ、共に涙を浮べて鋤を取り、可愛の山雀がなきがらを葬りて美し

き墓所を造りし時もありき。

當時余が最も親しき場所はと云へば、余が家の後にある小松原を半町あまり行き過ぎて少さき谷間あり。此谷の躑躅の茂み合ふ岩角の下より湧き出る清泉ありけるが此泉は、半疊敷よりは少し大きくして、乘りかゝる岩は何もあやしき苔の衣を着、泉の底は緑りなる水苔、清き流れに洗はれて水下に伏る間に、じゆんさい（馬の蹄の如き葉にて細長き莖ある水草）の所狹きまで生へ茂りたる傍に、腰をかくるに足るほどの古く半ば朽ちたる柏の切りかぶありけり。此面白き場處は毎日小學校より歸り來りて蝴蝶の如く舞ひ來る余に由て占領せられたる仙境なりき。

小學校に於ける余は最も好く出來たる生徒として褒められ、何時の試驗も優等の恩典にあづかり、着席を占めて學年の名譽ある阪を乘り越ゆると屢々なりけり。故に口さがなき多人の學童よりは甚だしく妬まれ「岡は先生の贔負で好き成蹟を得るなり」「吾々は岡と交際することを忌む渠の如き奴と交際するは身の穢なり」など云はれたることも屢々にして、余に取りては學校に出る事は宛も敵地に入るが如くなりき。故に余は試驗の來るも敢て温讀することもなく、別に準備をすることもなく、平氣にして只ウト〳〵と一室に閉ぢ籠りて淋しく暮すことを好みしが、余が斯くも内氣に暮せば暮す程、余が成蹟は益々優り、人は愈々余を罵りき。

斯の如き變則なる境遇は人世の花の如き時代より余をモギ去りて死の如き有様に運び行けり、然れ共余に取りては此の死の如き生活こそ却りて平和に滿ちたるものなりき。余は友余の時代に於ては最も密接なる鎖を以てつながれんとする友と云ふ觀念は斯くの如くして漸次に薄らき行き、予が敵地の如き學校より歸り來りて再び淋しき一室に籠らんとする時、余の可憐なる心情を慰めんとするものは此泉のみなりければ、余は當

物を机の上に投げ捨るや否や、飄然として菫たんぽゝの幽しき薫りにとざゝれたる小松原の中を忍び出で、天の使の羽衣につゝまれたる幼兒の如く例の泉に走り行くを毎とせり。泉は最も夏の初に於て余の愛する友なりき、其岩間の處々に咲き出でたる躑躅の紅色なるは、清水に映りて泉のブツ〳〵と湧き出る面に緋鹿子の模様を畫き出し、余がさしうつむきて泉を見る時には美しく裝はれたる人形の如く見へたり。余は徐ろに老たる柏の切株に腰を掛け、雨の手にて膝を抱き、杉の老木の茂れる木立、年經し松の腕の延びかゝりて手長猿の如く高き岩角を抱けるあたりを眺め、白き煙の如き浮雲の立ち上る樣を餘念もなく打見やりて、此の上なき快樂となし、時には四方の谷間の凄き程日は暮れはてゝ、只三ヶ月の黒き杉の木末にかゝりて銀の針金の如き光線の愛する泉にさし來る景色を喜びて歸る事を忘れたる迄も是處に止りたるとありたり。

斯くして余が十二の歳は暮れぬ、十三の春と明けぬ。茲年は孤獨なる生涯に育ちたる余には珍らしく樂しき年にして、余を閑散の中より救ひ出し、友と云ふ保護者を余が懷に抱かしめたる年なりき。然れ共快活に小石の上を走り下る小川の生涯にも、又渟滯して底暗き淵となる事あるが如く、余が此平和の一年は今日に至て最も悲痛なる日とはなりぬ。嗚呼歡極て悲生ずと云ふ不緣起なる論理は何の世までも取り去られぬものにや。余は例の如く閑散孤獨なる生涯を送る可き覺悟を以て今春を迎へたり、或る日の事余は枯木の杖を曳て屋後に聳ゆる松山の中に分入り、何がな清き泉を見出さんとて行きけるとありしが。不計も例の小松原の中を通へる小徑のあたりにて少女のなき悲しむ聲を聞きければ、只さへ流れの響きにも驚かされ易き余の感情は、忽ち人の聲に振り向きぬ。林の方に急ぎ見ればあはれ！身姿は賤しけれど何處となく高尙き風采あ

る可愛の少女は、下駄の端緒を蹈き切りてたつる事も得せず、跣のまゝ小石多き小徑の阪を走り下りつゝありけり。彼の女は定めし友に後れて人氣なき山路を歸るもの悲しさに堪へられずして泣きつゝ走り居ならんとの解釋は余の頭腦に起きぬ。余は直ちに走りよりて覺へず知らず抱き止め「あなたなぜ泣くの」と唐突に問ひ掛けしに、彼の女はないじやくりしながら「妾下駄の端緒を切りしが、自分にはたてきらす、皆さん私をほつてゆきましたから――歸るまでに日は暮れます」と調子惡く余の面を見上げながら答へき。余の頬は赤くなれり、何が故に赤くなりしやは知らざれども、只堪へざる感情は心臟の皷動を高めぬ。余は聞くより早く少女の提げたる山桐の駒下駄の塵り減されたるを取り上げ余が兵見帶を裂きて立て直し、而して少女に向ひ「サーあなたの宅まで送りませう」と言へば彼の女はいぶかしげに余の面を見上げ、涙にうるほはされていぢらしき愛らしき黑き瞳を見はりつゝ「イエ私一人で行きます、大きに有難たふございましたと答へぬ。ア、悲し！彼の女は余の深き心に對して餘りに氣弱くありしなり、彼の女は余の親切に對して自分が淋しき山路を獨り歩む可ぎ恐ろしさを忘れたるなり。余は益ゝ苦しくなり、立ち上りて覺へず少女の手を取り「サーお出でなさい」と誘ひぬ、彼の女は今はいなむに由なく余に從てトボリ〳〵歩みけるが、とかくする內、淋しき處も恐ろしき處も、何時しか過て、廣き明かなる田圃の中に出でたり。

夕日は西の山の手に入りかゝりて、峯づたひに並び立つ、老ひたる松の木立にかゝりて、眩ゆき光線は田の面に落ち返り、麓より黃金の砂煙の如き暮嵐立ち上りて、凡ての森も、凡ての田家も、凡ての藪も、凡ての畔道も、一面に桑畑たる薄絹の中に包まれ、時々我等が向ふ田圃の中に、金魚の如く躍る夕照の光線を見る

のみなりけり。二人の足は次第に速力を加へて畔道を辿りしが、日も半ば松の木末を見捨てゝ去り、余等二人は、黄金色の暮嵐に送られて、薄絹の中に深く包れつゝ進めり。既にして彼の女は高く茂れる竹藪にて繞らされたる茅葺の一棟を指ざし、「あすこが私の家です」と教へたり。余は彼の女の誘ふがまゝに處々破れたる塀をまがりて十四五歩石垣に沿ふて進めば角々の瓦もこはれたる形ばかりの門に出でぬ。内に入れば左は凡てほうれん草ちさなぞ植へ並べ、霜よけの藁のまだ處々に殘りある菜園の一面を以て占められ、右には女竹を以て築かれたる柴折戸樣のものあり。其の内部には手入れを怠られたる盆松は古のなごりを僅かに止め、蔦にまとはれつゝ淋しく立ち、少し奥には雜草の思ひの儘に廣がりたる勺藥の花壇あり。岩に彫まれたる手水鉢には木の葉ふりつみて水も乾き、古びたる柄杓の中には蜘蛛の巣を張りつめ、石菖ばらんの類は見事に生ひ立ちたれど、何も玉水のたゝきを以て汚されたり。余は斯くも古雅なる珍らしき庭園の中に誘はれたる喜ばしさに引かされて小女の事をも打ち忘れたる如くにて、只ボンヤリとして立ち止りぬ。少女は喜ばしげに虫のつゞりたる木輪のみ筋立し板椽の上に輕く飛び上り、チラと余の面を見しまゝ「お婆さん只今」といと笑ましげに奥に走り入りぬ。暫くして老婆は出で來れり、余は驚けり、老婆も驚けり、何が故に驚きしや、彼の老婆は年月余が家に親しく出入する大工の妻なりしが故なり。夫の大工と云へば昔は莊屋を勤めし者にて御維新以來いと零落し、あはれ漸く使ひ覺へたる鉋を揮ひて細くも日日の煙を立てぬ。余が家とは至極懇意にして居りき。故に余が今救ひたる少女は豫て聞く彼の老婆の孫女なりし事を知ると同時に、此不可思議緣故的出來事は一層緣故的感覺を打てり。彼の老婆は余より早く口を開き「マー若樣でしたか、是はマー何

んとした事ぞ、此夕間暮に、マーどうも孫を助け下さいまして。そしてドーモ今から若樣を御獨りで御返し申す事が出來ますものか、一寸御上りゑらい取り亂して居りますけれど、イ、エ是の婆が御送り申します。ドーモ飛だ御不禮をいたしまして、お光（孫女）があなたを存じませなんだから、イカニモあいすみませんで」と、不規則なる語調を以て、一方には余の位置に對して適當なる儀式を毀たざらんが爲めに、一方には孫女の己が敬崇する家の郎君に救はれたる喜を表せんが爲めに、無暗に囀りぬ。然れども余は此奇遇に由りて一種異樣な感情を起しければ、一言も答ふるの勇氣なく、「婆さんかへるよ、イヤモーイ、ヨ」と云ひ放して薄暗き田圃道を、呼び止むる老婆の聲を耳にも掛けず、一目散に走せ歸りぬ。余が内までは一里の餘もあらんに。

此の可愛らしき出來事の起りしより二日目に、老婆はお光と云へる孫女を携へて余の内に來り、余が兩親に篤く禮を述べ、且ッ先日の無禮を謝しなどして。特に余を慰めんとて殊更に愛らしき孫女の手に小き毛糸の袋を持たせ余の室に來りて禮を述べさせたり。余は憚る處なく白狀す余が此の時に於て始めて心中の友を得たるとを。彼の女は敎へられたる丈の語を口早に述べ終り、宛も初進の傳導師が辛ふじて說敎の叙文を述べ終りたる時の如く、側に向きて壁に掛けられたる額の畵を見上げぬ。余も亦手持ち無沙汰にボンヤリとして膝を直したるまゝ右の手にて着物の上前を引きつゝありき。斯くして花の如き少女と、柏の若芽の如き少年との初會は終りぬ。今年十四才になれる＝然れども小躰にして眞に無邪氣なる＝少女は、今年十三才になれる逞ましき少年の室に、殊に大なる丹波栗の五ッ六ッ紙に包みたるを名殘に遺して立ち去りぬ。　（未完）

子守歌

嵯峨のや主人

一

ねんねんよう、　おころりよ！
坊やは好子じや、　此方の子じや。
お月は清らか、　そちのねる、
お床を靜に、　さしのぞく。
お話しやうよ、　桃太郎の、
お歌歌はうよ、　子もり歌。
ねんねんよう、　おころりよ！
坊やは好子じや、　ねんねしな！

二

お窓を開けば、　日本海、
寄れる白波、　どう／＼と、
巖を洗ふて、　鳴響く。
響はそらの、　いかづち歟？
百千萬の　大砲歟？
岸邊にかゝる、　軍艦、
坊やも末には、　のんのして、
譽を世界に、　擧なされ。
譽を擧る、　其までは、
ねんねんよう　おころりよ！

三

海の向ひの、　露西亞には、
鷲の旗影、　へんぽんと、
世界をおどして、　ひるがへる。
なれども坊の、　兄弟は、
忠魂義膽の、　壯夫ぞ。
大和魂の、　前面に、
敵たうものゝ、　あるべきや。
ねんねんよう、　おころりよ！

四

お見やれ支那の、　大國も、
坊の御國に、　敵されう。
平壤、九連、　鳳凰や、
海城、營口、　牛莊の、
金城湯地も、　なんの其、
金州、旅順、　威海營、
世界に誇りし、　砲臺も、
瞬く暇に、　蹈やぶる、
日本の武勇は、　世に高し。
ねんねんよう、　おころりよ！

五

坊も大きく、　なッたらば、
腰にサアベル、　肩に銃、
馬に鞍置き、　またがりて、
世界を討に、　おゆきやれや。
後には母が、　唯ひとり、
我日本の、　かちどきを、
神や佛に、　祈りましよ。
ねんねんよう、　おころりよ！

なは籠

彦根　中島貞子

其一

殘んの雪も　きえやらぬ、
森のこかげに　籠一ッ。
身をきる如き　山風は、
峰より峰に　松が枝も、
折ん計りに　ふきすさぶ。
空灰色に　雲みちて、
今もふりなん　景色なり。

いと堪へ難き　けふの日に、
そも誰が業ぞ　此かごは。
中にはやなぎ、　山椿、
あるは梅が枝、　かず/\の、
花の小枝は、　手折られて。
さても如何なる、　人やらん。

其　二

唇もるゝ　いきをもて、
小さき手をば　暖めつ、
年よう/\に　七つ八つ、
やつれはてたる　幼女は、
行つもどりつ、　歌いつゝ、
背に負ふ乳兒の　母よびて、
泣くをすかしつ、　なぐさめて、
外山のふもと　行通へり。

其　三

日くれまじかく　成りにけり、
前の乙女は、　今一人、
母と思しき　賤の女と、
吹きくる風に　向ひつゝ、
うすき袂を　面にあて、
家路をいそぐ　木かげ道、
「母様、坊は　いねましぬ、
妾にひとつ　持たせてと、
かれ枝の小籠　手にとれば、」
母はねがほを　見やりつゝ、
「いたくな泣きは　せざりしか
あなよくいねて　安らげに。」
さも笑ましげに　見つめしが、
何思ひけん、　目に涙。

其　四

さまでに老ひし　身ならねど、

身にいたづきの　ありつらん、
面わもいたく　おとろへて、
吐息のさまも　くるしげに、
「早く歸りて　くれぬまに
束ねはてなん、　此はなを。
さはさりながら　此けしき、
覺束なきは　あすの空、
もしも雪など　ふりぬれば、
常の身ならぬ　我からだ、
市に行かれず、　さりもせば
うすき煙も　たち難し。」
語りながらも　いそぎきて、
程遠からぬ　あばら屋に、
やおらはな籠　おろしけり。

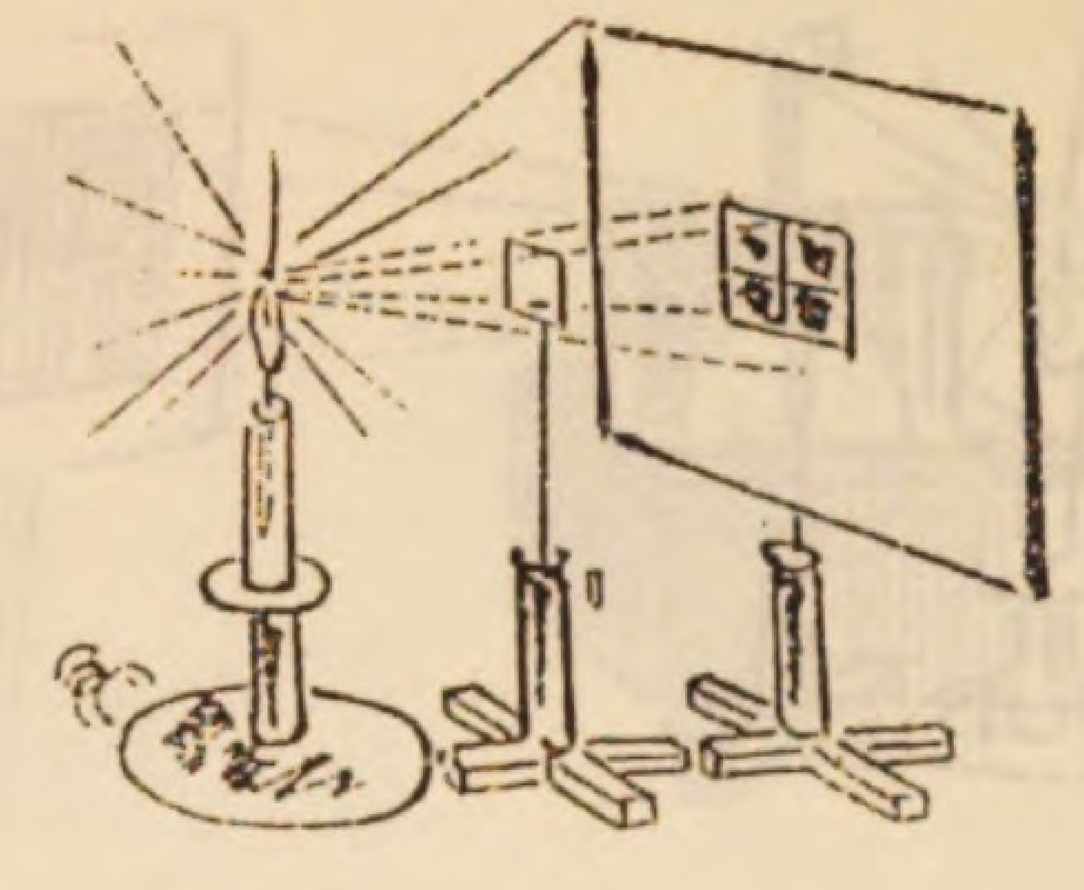
（をはり）

科學

光線のはなし　上

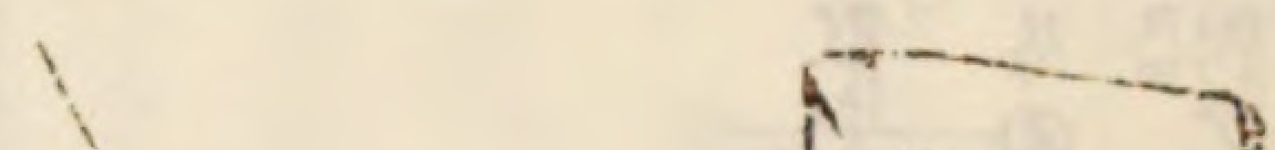
眠坊の太郎は、今朝も例のごとく、十時を過ぐる迄で安閑と眠りたるが、豆腐屋の呼び聲へに驚きて、ふと目を覺まし何心なく枕邊の障子を眺むるに、不思議や雨戸のしまりも暗らきに隣りの屋根と、その上よりのぞきたる松の一と枝は、實物の通り障子に寫つりたり。しかも直倒に寫つりたり。眠ぼけたる故かと思ひて、眼に唾きをつけ、頭を擡たげて見直すに影は、元の如くして變りなし。好奇心は太郎をして、思はず夜具を蹴て起ち上らしめ、昨日より女學校の休暇にて歸宅せる、姉なる良子を大聲に呼ばしめたり。餘りに大聲なるに驚きて、姉は何事ならんと走せ付け見るに、寢衣のまゝなる弟は、眼をこすりながら、その不思議

の現象を、夢中となりて語れり。姉はおちつきて『其樣に驚くには及ばず。こは太陽の光線の道理を知らば、明きらかに解し得べし。先づ衣物にても更へ朝飯をすまし給へ。委はしくそのわけを談すべし』と云ひければ、太郎はあはてゝ姉の命の如くし、手早く食事もすませ姉の處に走せゆけり。姉は已に先きの暗室にありて一本の蠟燭を點じ、蠟燭より一尺計りを隔だてゝ、一尺四方の板一枚を置き、それより又た一尺計りを隔だてゝ、白き屛風を立て、太郎を待ち受けたる時にぞありける。



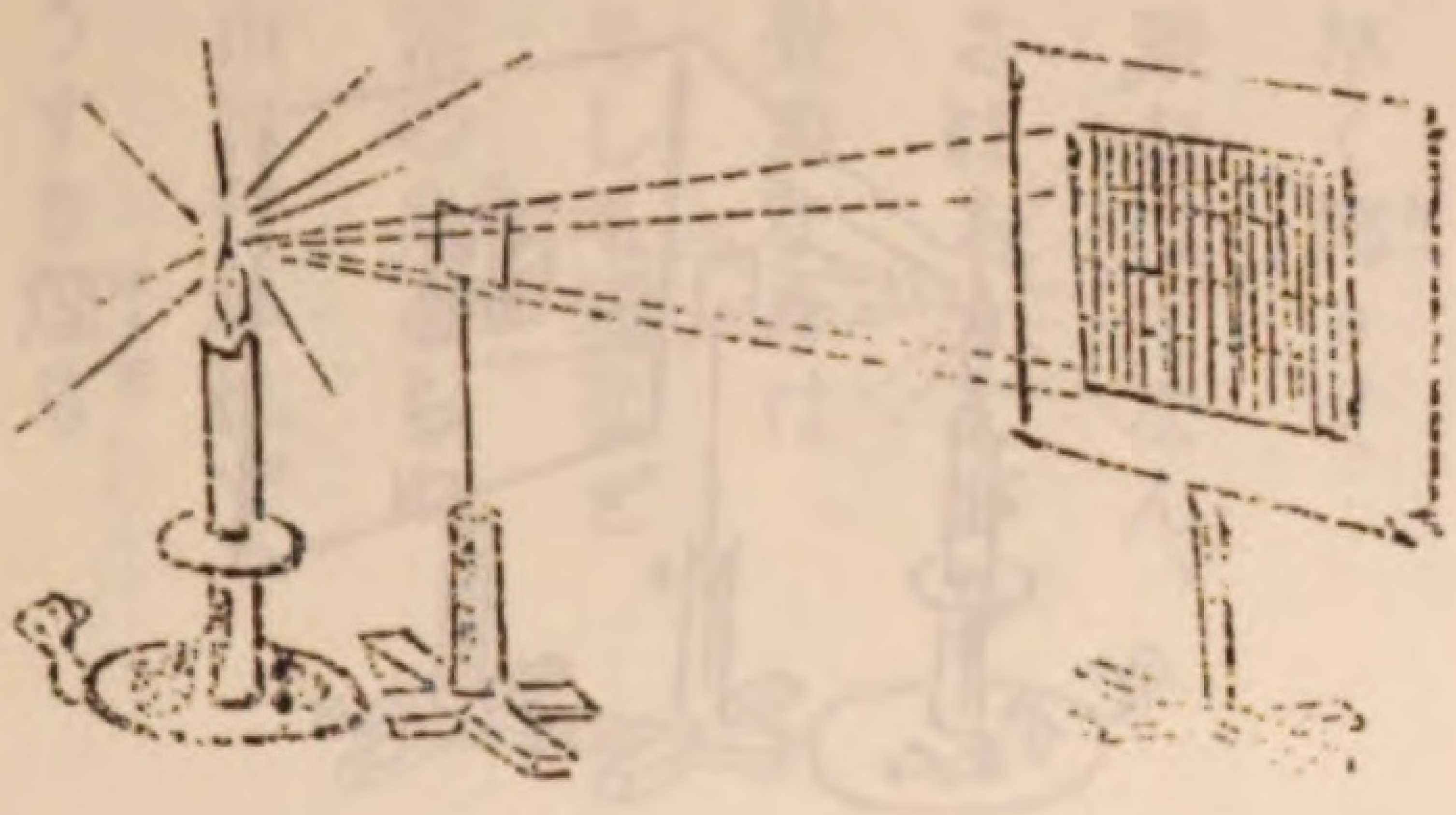
第一圖

太郎の來れるを見て、姉は口を開らき『光線のことを說明するには、先づその原とより談なさゞるべからず。今ま此の仕掛けは、凡べてその光線は、直射して曲がるものにあらざるを試驗する、手近き法なり。見給へ、この板は確かに四方一尺あれども、この屛風は蠟燭より幾尺を隔てたりや、明かに知る能はず。然かるにこの屛風に寫つれる板の蔭の大さを知らんと欲せば、光りより板の隅み迄で、直つすぐに糸を引き、その糸を延ばして、少こしも曲がらざる樣注意しつゝ、屛風迄で引て。その糸の長さを計るに、この屛風と光りの距離は二尺なりしを知るを得べし。さる時は屛風に寫つれる板の蔭は蠟燭と屛風の距離の二倍、



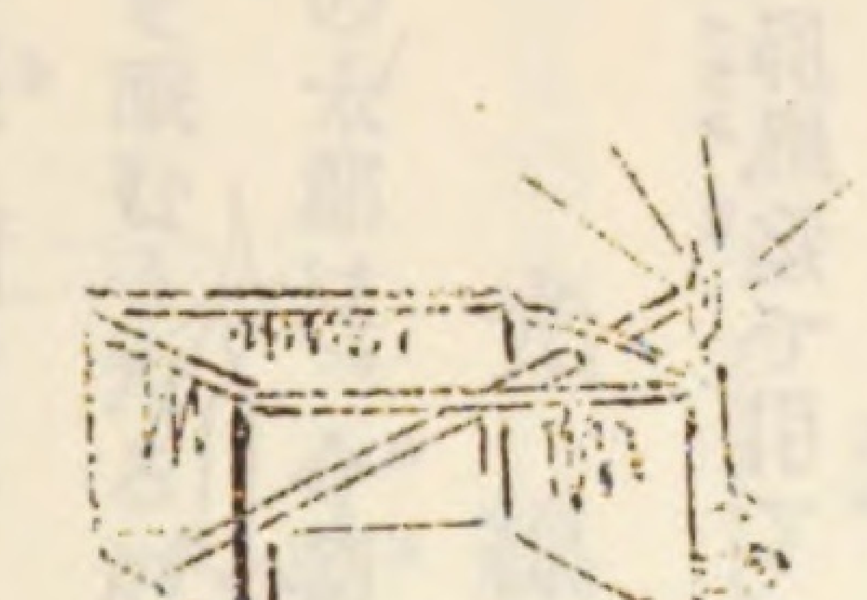
第二圖

即ち(2×2)四尺四方なるを知るべし。更らに屏風を退りぞけて、蠟燭より三尺の所に置かば、陰は(3×3)九倍となり、四尺の所に置かば、(4×4)十六倍となるべし。



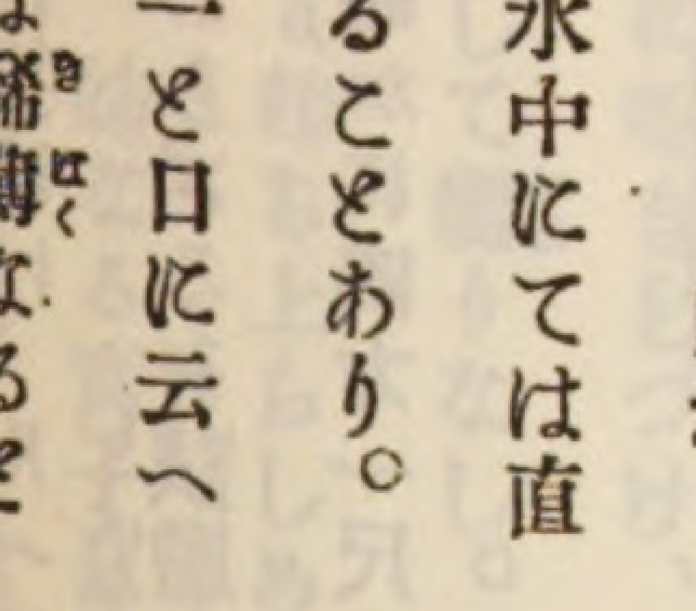
第三圖

此の度は光線の曲がることあるを示すべしとて、姉は感心したる弟をして、水の漏らざる菓子箱を持ち來たらしむ。菓子箱は第四圖の如とく、上の方に一つの穴を穿ちて、蠟燭の側ばに置かれたり、光りはその穴を通して(イ)の所に達せり。姉は之を指びざし示めせる樣『空氣の中にては、光線は殆ど直射して常に違がへざれば、この箱の穴を通して入りたる光線は、直ぐにその底に達せる



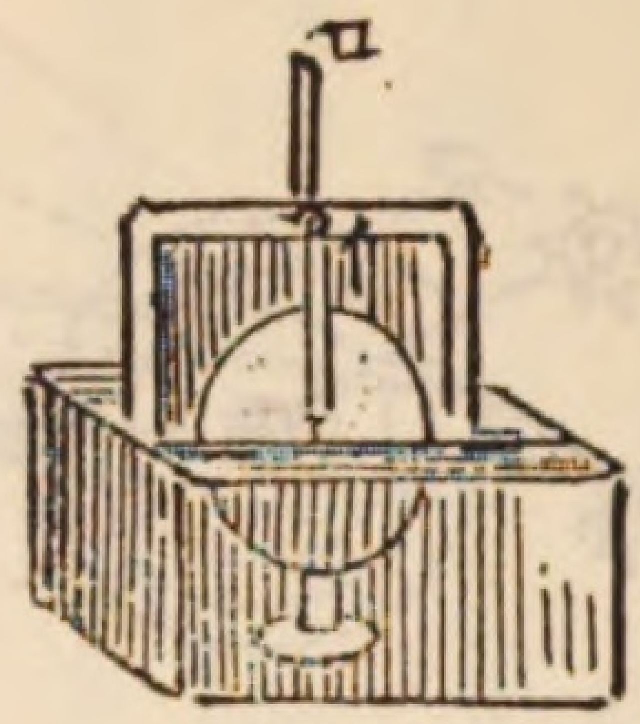
第四圖

が、玆に透明躰なる水を入る時は、光線は見る／＼曲折して、第五圖の如とく(ロ)の所を射るべし。手水鉢の柄杓の柄が、水の中にては、折れたる如とく、曲がりて見ゆるも、全く同なじ光線の曲折に由るものなるが、之れと反對にして、曲がりたる棒は水中にては直ぐに見ゆることあり。透明躰と一と口に云へば、是には稀薄なると濃厚なるとの別あり。



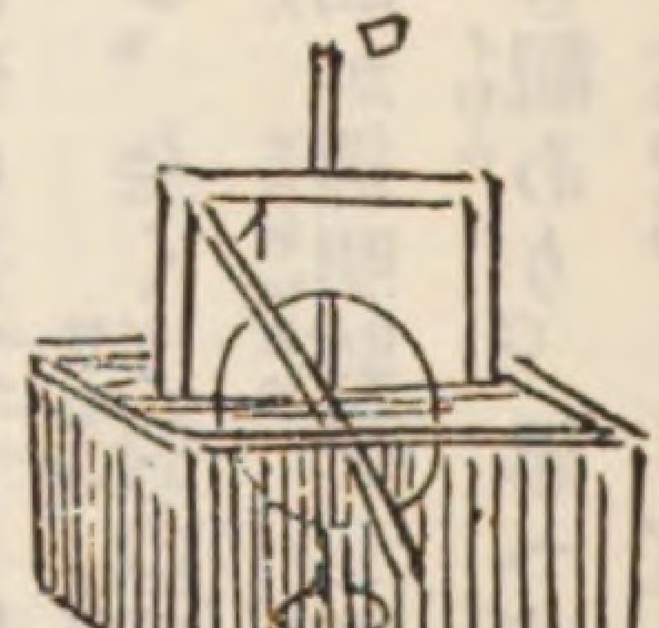
第五圖

その濃淡の度によりては、又た各々曲折の度を同ふせず、其の度を料かるには、第六圖の如き器械あり。圖中の(イ)なる棒は、板の中央に釘にて止たる、回轉自由に作くれる棒なるが、箱の中に、試驗せんとする液を盛りて、僅づかにその棒の下端をのみ浸したる所なり。今若し棒を眞直ならしむること圖の如とくなるときは、液中に映ぜる棒の蔭は、少しも曲がることなけれども、少しくこれを動かして、第七圖の如とくなすときは、液中に映ずる蔭は、液の濃淡によりて、傾斜の度を異にすべし。曲折は水や油の如き流動躰の中のみならず、空氣や、水素や、窒



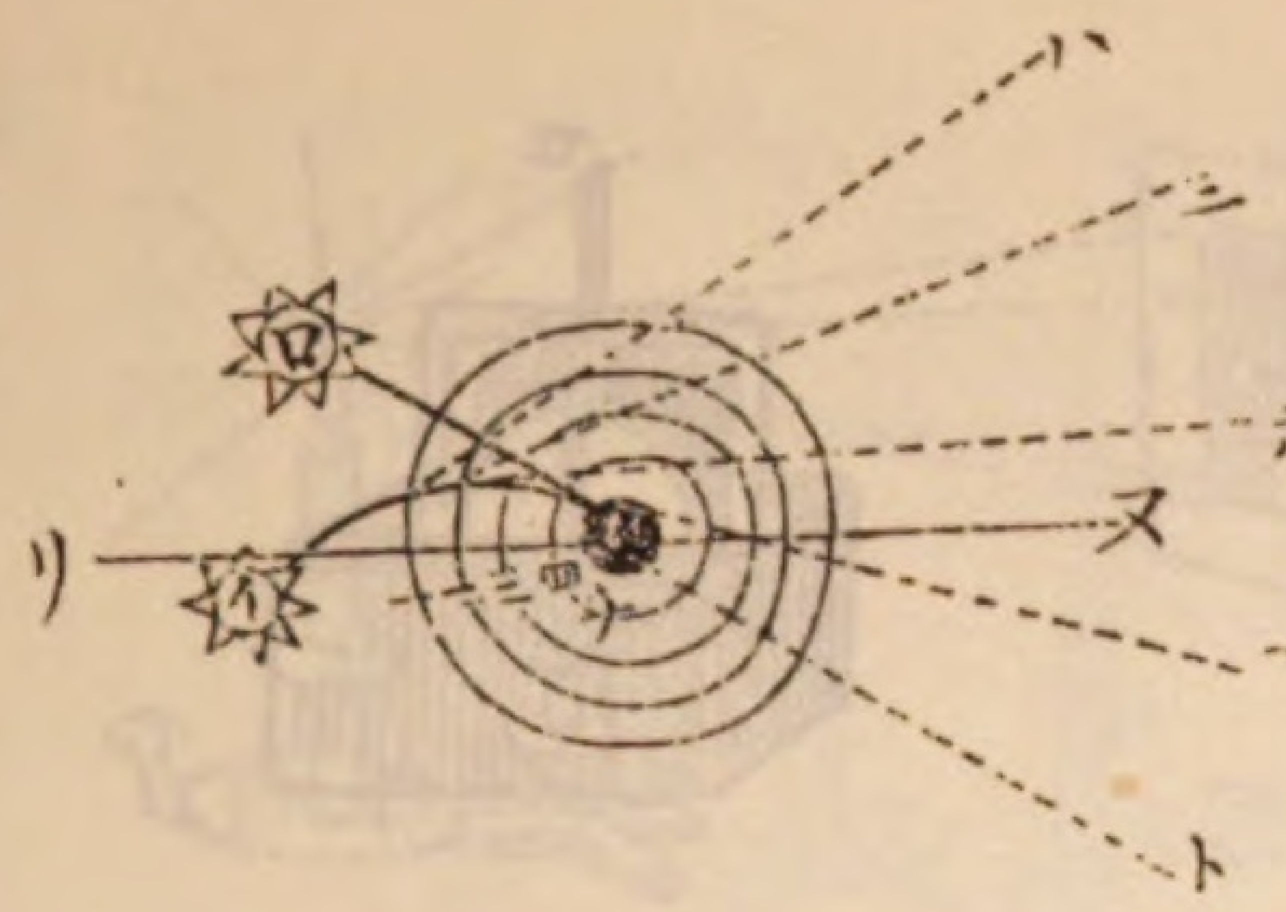
第六圖

素の如き、氣躰の中にもあり。然れども氣躰は何れも曲折甚だ少なく、特に空氣は實に僅づかなるものにして、空虚に比して、二億九千四百萬の一の曲折に過ぎず。それさへも地上を去るいよ〳〵遠ほき山上に至りて、空氣稀薄となるに隨たがひて、益々折曲の度を減ずるが故に、最も高かき所にては、太陽の光線曲折なること、殆ど計り得ざるに至る。この光線の曲折あるにより、我等は毎日知らざる間にも、大なる利益を得つゝあり。そは若し地上に空氣なくして、少しの光線も曲折することなければ、我れ等は漸々明かるくなる曉を持たず、漸々暗らくなる夕方もなくし



第七圖

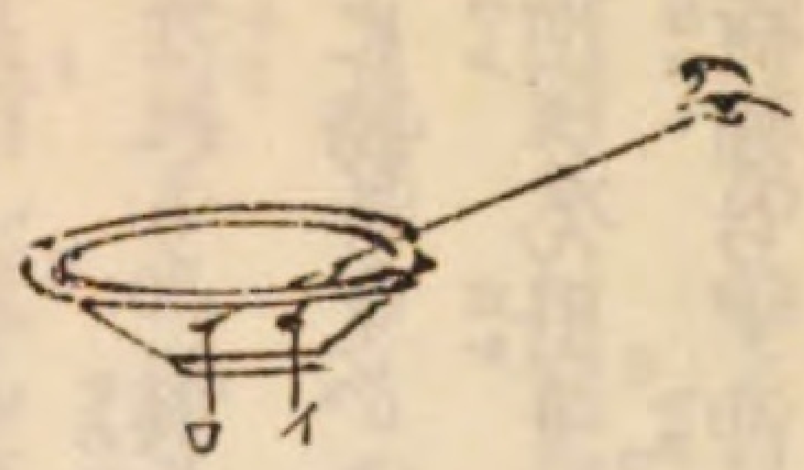
て、朝は太陽の地頭を出づると共に、電燈を點ぜる如く驚くべき仕方に、一時に明かるくなり。夕は太陽の隱くるゝと共に、眼を潰ぶしたる如とく眞黒となりて、たゞに便利不便利の上のみならず、人の眼は輕ろくしても眼病となり、重もくしては、全く明を失しなふを免かれざるべし。第八圖は空氣が太陽の光線を曲折せしむる度を示せるものなり。圖中(チ)は地球にして、(イ)は未だ太陽が、(リ)(ヌ)の地平線以下に隱くれたる時の有樣なり。さて太陽が(チ)の所にある時は、その光線は地球の中心より、最も遠ほくして、空氣の最も稀薄なる部分、即ち圖中の最も外部の線、(一)の所を通過するが故へに、その曲折は最も少なくして、殆どなきが如とき有樣なれども、太陽の漸くのぼるに隨たがひ、その光線は(二)(三)(四)と漸次に、厚つき空氣の中を通るが故へに、その曲折も亦た(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)と次第に甚だしくなり、太陽が(ロ)の所に至たる頃は、最も曲折の甚だしき時にして、その光線は地球を隔だてたる、全く反對の半面をまで照らすこと、恰も地球の全面が透明躰にして、光線の通過を妨またげざるが如とき觀あり。思へば實に都合好く出來たるもの也。」



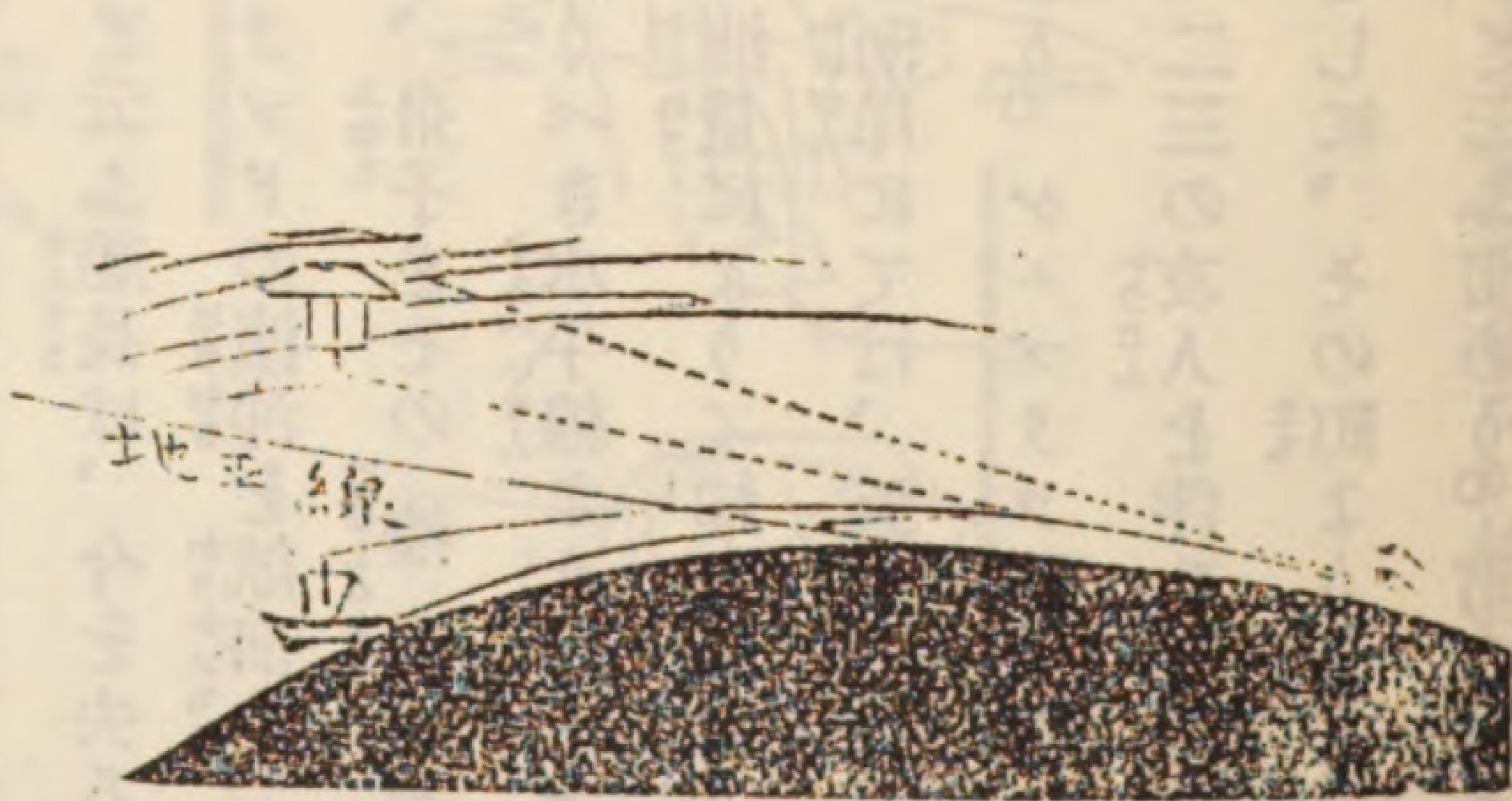
第八圖

今ま金盥の中に石を置くこと、第九圖の(イ)の所の如とく、人の目は其の線に遮ぎられて見へざる位の所の立ち、少しも動かずして立ち居るに、もし一人ありて、其の金盥の中に水を灑そぐときは、石はずつと浮びたる如とく、(ロ)の所に來たり、先きに見へざりし人の目に、明らかに見ゆるに至たるべし。

それと同なじ理によりて生ずる、實に不思議と思もわるべき一事あり。昔しは海中の鬼神の業なりと云ひ、或るひは人の幽靈なりと稱せしが、學術は鬼神の本躰を觀破して、こは光線の曲折より、生ずる、蜃氣樓なる現象なることを確しかめたり。伊豆の沖なりしと記憶す。或る時船頭の息子、船をこぎて漁業に出でけるが、其日は朝より空氣壓さゆるが如く、もや〳〵と蒸し熱つく、氣持ち悪しき日なりしが、遙るか彼處に、晴出で丶歸らざる父の同なじく、漁りせるを、明々と見受けしかば、同なじ所にて、助すけ合ひ漁せば、得る所多かるべしと思ひつ丶、その船を目ざして、漕ぎ始じめしに、もはや二里も行きしと思ふに、父の船は漕もせざるに、始と同なじ距離にありて、少こしも近かづかず、息子は漸やく疑がひたり、されども父の顔も、舟もあり〳〵と見へて、少しも違ふ所なければ、又た勇氣を振るい起こして、漕ぎ行けり。一里行けども、二里行けども矢張父の舟には達する樣も見へざれば、遂に恐れ



第九圖



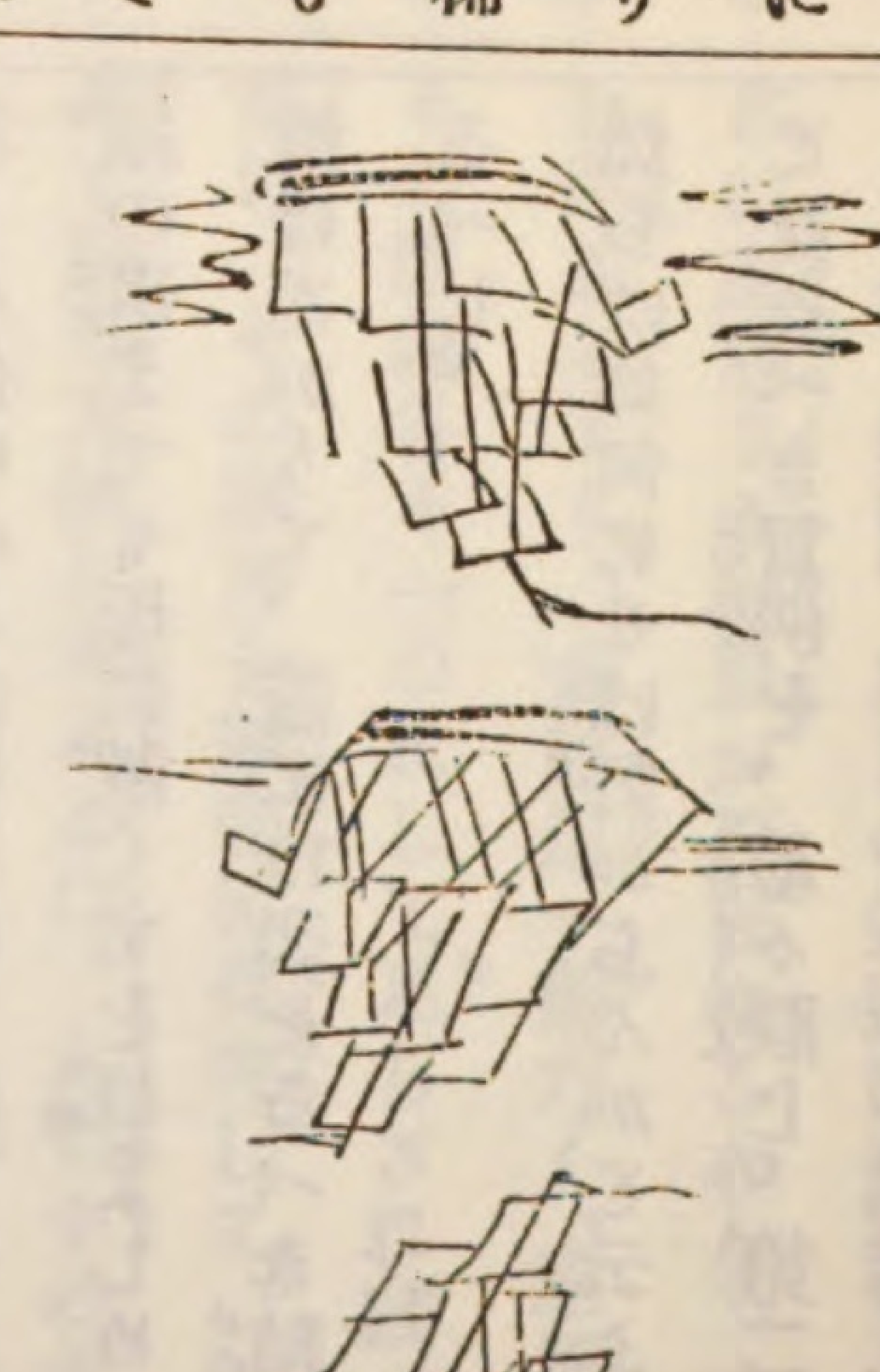
第十圖

を生じ思もへる樣、これぞ海神のたゝりにて、余を導びきて、人も通よわぬ海底に墜し入れ、生きながら食物にせん手立にはあらずやと、忽ち船を返へして、一目散に元との路を指して急ぎけるが、未だ一里も立たずと思ふ頃ふと後へを覩しに、今の今迄見へつゝありし父の舟は、全く見へずなり、それと同時に氣も晴れやかになれり。其日の夕方に至たり、息子はあへぎ〳〵家に歸りて、今日の不思議を、母と兄弟に語り、膽をも潰さん計りに驚きつゝありけるに、程なくして父は、何知らず沖より歸り來たれり。其日父は、息子の舟より十三里計り距たりたる所にて、漁せしとは、父の談によりて知られけり。去れば父は蜃氣樓によりて映りて子の前に現れし也。今日より見れば、これぞ蜃氣樓なるは明かなれども、當時怪談として語たり傳へられたり。

かゝる談話は、たゞに日本海のみならず、萬國至る所に、其例夥多ありて、之を語らんには、面白きことも多くあれども、限ぎりある時間のゆるすべきにあらざれば、今一二の例をのみ引かんに、有名なるスユルスベーと云ふ船長は、今を去る七十年計り以前に、グリーンランドの濱沖を航海中、三十哩先きなる船の中にある、舟子とその檣迄、あり〳〵と見たり。こは目の屆くべき水平線より、十七哩の以下にありしとは、後の測量によりて知られたり。佛蘭西のヘスチングと云ふ海岸にては、五十哩先きにある、岩の見へたることあり。ゲムブリッチ大學の敎授ヴ井ンスと云ふ人は、二三の友人を伴ひて、ラムスゲートと云ふ所を通行せしに、その町より高き丘を隔だてたる彼處にダヴアーと云ふ町あり。町の向ふの端づれに、一の城郭あり。元とよりその距離と云ひ、丘の高かさと云ひ、平生その地より城を見るべきにあらざるに、千八百〇六年、一月六日、少しく空氣壓して、靜なる夕暮なり

き、城は近かくその町の中にあるが如とく、その全躰を見るを得たりと云へり。かゝるためしはめづらしからず、又た不思議にもあらず、試驗によりて手易すくこれを實驗するを得べし。

今コップの中に濃き砂糖水を入れをき、その中にそつと清水を入れ、さてコップを覗ぞき見るに、一つの顔は、二たつの如く見ゆべし。これ砂糖水の濃厚なるに比して、清水は稀薄なるが故へに、曲折の度合によりて、かく見ゆるものにして、蒸し熱き空氣の上に、稀薄なる空氣ある時も、同なじわけによりて反射するものなり。若し更らにコップの清水の上より、酒を灑ぎたらんには、酒は清水よりも尙ほ薄すきが故に、又た寫つれる顔はは增して、三つに見ゆべし。空氣の中にても、時に一つの物品、三つに見ゆることあり。先のクムブリッヂ大學教授は、ある時ラムスゲートと云ふ所にて實物なる一の船の上に、更らに二たつの船の、(十)圖の如とく、三樣に寫りたるを見たることありと云へり。コップの中の、冷水の上部に、熱したる鐵を挿し込みて、一部をのみ熱せしむるに、熱したる湯は、冷水より稀薄なるが故へに、先きの砂糖水と同じく、二樣の顔を寫つすことを得べし。



第十一圖

以上は姉の談なるが之より光線の屈折を利用して手品師の種々なる業を爲すことより、其他種々の談柄を、

或は實際に試驗し、或は、石盤に圖を示めし、或ひは例を引きて説明せしかば、弟は驚きあきれて、姉の談を聞き居たるが、もはや晝飯にも近かづきければ、後は午後に殘こすことゝはなれり。

家政

家庭の教育

眞と虚言

『坊や何をして居たの？何も仕なかつた。それでも餘り静づかの様だつたチー。たゞじつと坐つて書物を見て居ました。そうではないだろう、おまへの口の端には、砂糖が付いてるよ。又た泥棒を仕たのだろう。なぜおまへはそうだろうね、幾度言つて聞かしても直ほらないチ。今日こそはもう御膳を食べさせないから、何へでも出ておいき。内の子ではない馬鹿者！。』とは屢々戸外に漏れ聞こゆる母親の小言なり。されども小供に虚言の習慣の付きたるものは、かゝる類の小言にては、決して癒ゆるものにあらず。かゝる類の小言は、たゞ益々小供の心を曲げしめ、虚言を上手にならしめ、瑣細の事までも母に敵くすを好ましめ、ます〳〵眞實と遠ほざかりて、遂には恐そるべき結果を生ずるに至たるべし。

然らば如何にせば好からんかと云ふに、第一好き手本となるべき實例を、屢々談じ。第二虚言に至れる原因を精密に探究し、第三小供が過失を爲して、又た叱からるゝかと、ビク〳〵せる時、嚴びしく叱からず。反て、後より其過失なりし事を、心静かに話し聞しめ、第四若し已が過りしことを、詫ぶるか如きとあらば、大に之れを賞し、第五虚言を云ふ者の言葉は何を言ふとも、信ぜずとて、その子の言の信用なく、品格の卑

しむべき事を、恥づかしむる等にあり、これ一方に、眞實の快樂を示めして、之れを勵げましつゝ、一方に虚言の悪しくして、不愉快、不利益なることを知らしむるが故に、虚言を矯正するに、最も良き方法と云ふべし。

第一の好き實例と云ふは、讀本や英語のリードルや、日曜學校の讀本等を見れば、いくらもあるべし。極めて小さき小供には、小學修身讀本の中にある、小供が竊そかに臺所の戸棚の中の、瓶の中より豆を取らんとして、無理に手を入れ、手の取れざる話等によりて、説明するも可なるべく、少しく大いなる小供には、ワシントンが父の櫻の木を折りしを詫びたる美談等も良かるべく、尚ほ高尚なることを解し、文字をも讀むべき小供には、それ等の談しの集めたる書物を讀ましめて、自覺せしむるる可なるべし。

第二の、虚言の原因を探究すると云ふことは、甚だ大切なることなり。生れ付き善良なりし小供が、友人の悪しきものありしより、虚言の習慣を養ふに主たりしこと屢々あり。母が父に向つて胡麻かしを云ふを見習ひて、雁の後に隨たがふ鳩の如き、見習的胡麻かしに至たることあり。或は肝癪强よき母の言葉が、小供をして止を得ず、虚言の逃道に走しらしむるとあり。中には虚弱なる健康が原因なるあり。又た適せざる食物を與ふるより、食慾堪へ難たく、遂に過つものある等、その原因各々一つにして足らざれば、母の責任は平素常に、その原因を細密に探究して、水の漏るべき穴を止どむる方法を考ゆるは、大切中の大切なる業也。

第三の叱かるべき時機を計ること、これ又た忽にすべき問題にあらず。誰れにても、過を爲して叱かられんことを恐るゝ、其時は、たゞ如何にかしてこのつらき時を過ぐさばやと、願ふ心、切にして何と云はるゝも、はい〳〵と云ひて、この恐ろしき時を過ぐれば、

叉た後は後のこと也。今のみは何にても聽くべし、叱り給へ詫ぶべし、謝すべし、ぶたるゝも覺悟なり、只だ一時も早く其叱り顔の前を退ぞかんこそ願はしけれと。他の慾も、得も、多くは耳に止まらざるが常なれば。其時無暗みに叱り付けたりとて、深かき善心を、眞心に植へ付くることは、甚だ難たし、それよりは、夜中の如き、心靜づまりて、眞心の耳さとく、善の樂しくして、惡の恐ろしく、不愉快なることを、覺とるに適せる時を撰らび、とく／＼と心に落つる樣、話し聞かしむべし。彼の時の一時の小言は、此の時の一合にも及ばざるべし。』

第四詫びたる時に賞するとを怠る勿れと云ふは、時に無理なる親あるを見受くるが故なり、若し母にして無理なる事あるか、母が自らを觀る時は少しく敎育ある母ならば、何れが非なりしかは、明かなるべけれども、かく迄正邪の明かならずして、むしろ小供の過失のみに歸すべき時なりとも、もし自ら惡しかりしことを悟りて、過ちしときはむしろその詫びしことを賞するも、その過失に付きては、甚だしく叱からず、他日氣平らかなる時、よく／＼之れを談し聞かしむるは、子供をして虛言に導かしめざる第一の道なり。

第五は最早成長したる小供に對して用ゆる方法なり。彼は平生、已でに虛言の正邪も、とくと知りたる上なれども、習慣によりて思はずも、虛言を爲すものなり。これには好き實例も、馬耳東風ならん、叱かるも小供らしくしておかしかるべし。道理を說かんか、彼は已でに十分も廿分も道理は知れり。かゝる小供と云ふより、むしろ大供に向つては、その者の云ふ所を信ぜずして、その言葉の信用のなく、品格のなき、つらさを、充分に味はしむるより、良きはなし。

元とよりすべての物には例外あり。善例も餘り度々なる時は、俗に所謂耳がタコとなりて聞けども、これへ

ず、詫も度々賞する計りなれば賞せられんために詫ぶることあり。何事も適宜と度合とは、最も必要にして教育者が常に注目しつゝ、考へつゝ、賢こく方法を利用するは忘るべきにあらず。

料理の化學

女學校にて習ひ得たる化學は、水素や、炭素を、試驗するのみにて、功用も少なきものなり。化學を最も婦人に利益ある用ゐ方と爲さんと欲せば、毎日の料理の上に應用するに若くはなし。これ折角大切なる時間をかけ、學資をかけ、腦力を用ひて學び得たる學藝をして、無益に歸せしめずして大なる利益を得るの最良法なり。女學校出の婦人が、かゝることに學術を利用せざるより、家持てよりは學問の光は消へて、後なき姿とはなるなり。

若し女學校出の妻君が、化學を利用することゝ、かくの如き手近きものにあるときは、第一は生活の費用を減じ。第二は疾病の原因を絶ち、第三は施ひて一國の罪悪の原因を少なくして、道德を增し進すむるの道ともなるべし。

米國のオハヨー州にては、その州中にて用ゆる日々の食物は、政府にて一々化學上の試驗して、藥、乾物何にかぎらず、其試驗を經ざるものは、賣買すること能はざらしむるが故へに、一軒〳〵にその恩澤を蒙むると、淺からざれども、かゝる仕組のなき我國等にては一軒〳〵の妻君が、試驗官となりて、日常の食品を分解し、何の職業には何れの原料が最も適し、その原料は何れの食物の中に含くめりと云ふとを知り、高價の物品必ずしも滋養に富めるにあらず、安價のものにも多くの滋養のあることを知り。同じ名物品にても化學的に試驗せば、彼には養分多く、是れには養分の少き

ものあるを知り、少なき價を投じて人生に最も多く必要なる物品を用ゆることを爲すべきなり。たとへば同じく小供を養ふべき、「コンデンスミルク」にても、中には牛乳を僅かのみ加へたるジヤガ芋の煉り物あり。生乳には、白水の混じたるあり。コーヒーと云ひて其實、粉を燒き、砂糖とザツカリン(礶精)とて此の頃菓子に用ゆる甘きものを混じたるあり。安すき葡萄酒には、燒酒と水と赤き色粉のみにて、少しの葡萄を加へざるものあり。甚だしきは人の生命に關する藥にして、有害ならざるも全く無益なる物品を、高價に賣り付くるものあり。殊とにも日常用ゆる齒磨粉等は、人の齒を害すべき、砂或は烏賊の甲を以て造りたるもの等ありて、知らざればこそ何とも思はざれ、化學的に試驗をほどこしたらんには、無益にして若かも有害なるものを、高々出だして使用せるもの算ふべからず。若し家々の妻君が手近なる化學を利用する樣になれば幾多の胃病は救くはれ、幾多の財貨は沸き出で、幾多の不幸は減ぜられ、世の中より涙の種子を去ること、ドブを掃除してコレラのバチルスを除くが如けん。

借財

筑巒女史

世に誰れ人も知る借財てふものは善からぬ事の基なれば極めて愼むべきものとは知りながらも兎角身不相應なる暮しをなし收入伸縮にも頓着せずして奢侈に耽るときは忽ちに借財にて一時の急場を凌ぐ事となるものなり一度人に金錢の世話を受くる時はいかに信用厚かりし人も大切なる地位名望を失ふのみならず輕蔑を受くるに至りいと親しかりし友垣もへたてすき間を生じ遂には交りをも絕つに至らん一犬虛を吠へて萬犬之を傳ふるたとへの如く借りたる人の信用を失ふ時は自然

一般社會に信用を失ふ基なればいかに外面を裝ふとも心ある者には見すてられ一度社會に汚名を流布せる時はいかによみすき志操を抱くとも信用なければ交際爲す者もなかるべく世の癈人としてむなしく歳月を費すの外なからんわらはが近邊にいと奢りて暮せし人ありしがきのふまでは巍然たりし家藏も今は債主に奪ひとられ百花爛熳たりし庭園もいまはむぐらが宿となりとふ人なければ蓬生のみはおのかじゝいやが上にも生へ繁り見る影もなくなり果てぬ定めなきは人の身の上とは云ひながら綾羅にあきし彼の家の妻君も今は朝暮のたつきに苦しみつらん無邪氣なる子供等には好むに應ぜざるを訴へらるゝ親としては其の心の中やいかならん思ひやられて憐れなり其の外知れる人の多くの借財を遺して世を去りにけるかその爲めに跡に殘りし妻子の路頭に迷ひ幸ひにも慈悲深き人に救ひ上けられしも讓り受けし借財を未來永々子供の負擔にしあれば浮かぶ時はなかるべし親として借財を遺す時は更に親たる責任を失ひ却て子孫を困苦に陷るあな恐るべき甚ならずや左れば今日の暮しをは收入身分相應にしいさゝかだにも油斷なくとかく節儉を旨とし如何に苦るしき時にもなるべく借財せぬ樣自力にて凌きをつけ入用増さは働きを増し收入を殖し平生より正かの時の用心を爲し置く事緊要になん

『手藝案内』

本號は記事多端なりしが爲め掲載の餘地無之候得共次號よりは益々有益にして簡易なる手藝を栞して大に此道の發達を期し申候

社交一斑

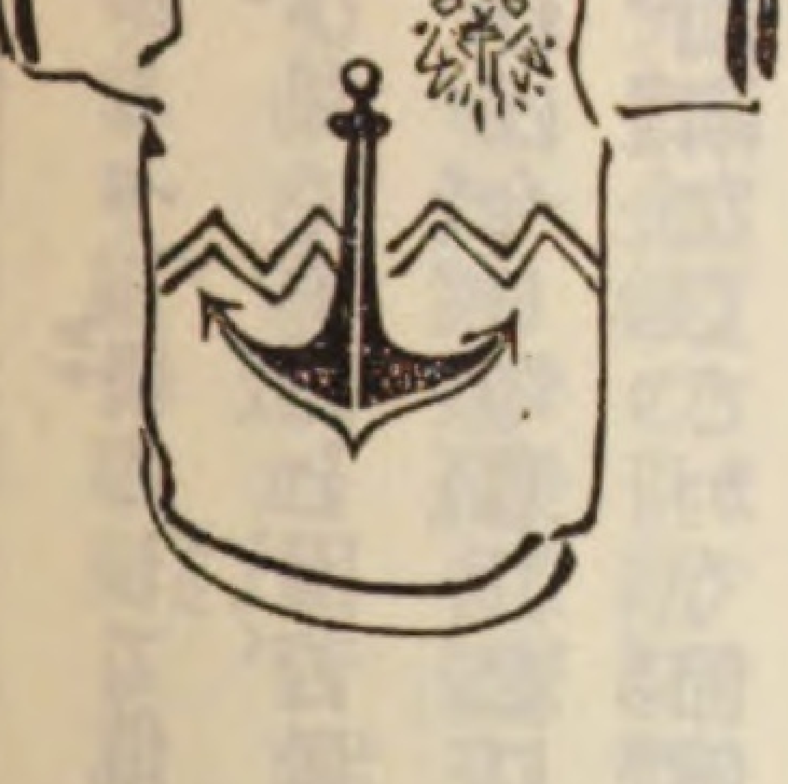
流行の栞

花見の趣向

春夢

昨今は正に百花爛漫、春風駘蕩の時季となり、満城の春景色、實に綾錦を織りたるが如く青紅相交りて美觀眼を眩すは年々相變らず、毎年此頃に至れば、都下百五十萬の人衆我先にと花見に出でかけ衣袖帽影一層の景色を添ゆるが、さて此花見につきてはいろ〳〵の趣あり、殊に墨堤の花盛りより葉櫻になるまで堤上堤下の賑ひは實に言語に絕し、他國人の目から見る時には、殆んど狂とも痴とも思はれんが、東京人は櫻見物には實に念を入れ精を凝らし、他の花見客をしてアッと驚嘆せしむるを樂と爲すが如し、瓢箪を腰にぶら下げて花蝶に迷ひ歩く位は普通の話なれど、臙脂、紅粉を顔に塗りちらし、或は紙面をつけ、或はかつらを被り、或は天窓を可笑しく剃り剃ぎ、或は摺木をたばさみて大小に代へ、是等の連中大道にて茶番狂言を試み、知らぬ連中と連中と出合がしらに一寸面白い洒落をやり、其光景千差萬別にして一々形容の盡くす所にあらず、大低かゝる連中は酒を鯨飲して充分勢をつけてからの仕事なれば、其行狀眞に落花狼藉、毎年櫻時に墨田の土堤より轉び落ちし醉漢幾十人あるや知れず、以て其の盛なるを察すべし、而して其の花見の趣向は毎年大低相變らず、夫の『七偏人』の茶目吉、喜四郎、虚呂松輩が、初卯の日に亀井戸にて、茶番狂言をしくみし趣向と異ならず、其處にありし大當りの芝居をまねるなどが是迄の流行なるが、本年は大に趣向一變したるもこれ勢の然らしむるものならんか。

如何に變化したるか、言ふまでもなく社會の風潮に連れ花見の趣向も日清戰爭の影響を受け、大日本大勝利、清國大敗北の催し多からん、此記事を書く時は（四月五日）漸く花見の客出始りたる頃にて未だ盛域に至らざれば實際の景況を報ずる能はざれど、余が聞き及ぶ所にては日清戰爭のしぐめる連中尠からず、今日より廿四五日迄は續々顯はるべし、三日の神武天皇祭には稍其兆候を顯はしたれば、やがて此流行の



極を見るならんか、多く目に觸れたる日本大勝利形とも申すべきは圖に示すが如き形にして色の模樣ある「シヤツ」なり、勿論其形はいろ〳〵ありたれども、其趣向に於ては

同一なり、金鵄勲章とか、錨とか、國旗とかを描きあり、紙面の如きに至りても、例年によれば、天狗とか、瓢床とか、おかめとか、花魁とかに過ぎざりしが、今歳は我日本帝國の軍人の紙面大に流行の傾向あり其形は圖の如し。



男女の衣服に於ても其通り、羽織や、半襟や、長繻袢や、帯や、其他日本大勝利形と稱せらるゝものは、通常の場合にては頗る俗氣を帶びれども、花見の時なぞには何よりの趣向なり。

小娘少女の花簪も聯隊旗に櫻花をかざせるもの、又は金銀モール製の櫻花かんざしか、又は派手やかなる形行はるべし。

小供の風船玉は豚尾の首。

學校生徒の運動會には日清兩軍に分れて活潑なる遊戯多く、聯隊旗を推したて喇叭を吹き立て行く樣勇ましくも亦可憐なり。

流行の言語

さて〳〵流行といふものは奇なるものかな、初代市川團十郎の「つがもれね」の臺詞は忽ち江戸市中の流行語となりて通人の口癖となり、尾上梅幸が鹽原多助の田舍言葉「どんせん」は忽ち東京の大評判となり互家の子女も之を口にするに至りぬ、然るに昨年下半期の始めより日清戰爭起りしより、軍事的の通語大に行はれ、男子と男子との談話は申すに及ばず、婦人と婦人の談話の中にも、學生、令孃、下りて花柳社會、おさん社會、又は赤郞社會にも軍事的通語を引用せらるゝを聞く、譬へば『占領』『略取』『乘取』若しくば『攻擊』若しくば『降伏』若しくば『縱隊』若しくは『一齊射擊』若しくば『前進』若しくば『退進』若しくば『號令』若しくば『戰鬪線』若しくは『偵察』とか種々なる軍事的通語を總ての談話の中に應用するは、其快活にして時節柄趣味多きは到底俳優なんどの通語をさへづるの柔弱にして、無意味なるの比にあらず、這般の流行は幾くは我國民をして軍事的思想を起さしむの階段ならんか。

女の袷

時下最も袷の時季に遭遇す以下其流行を記さん。

婦人物(上)日一日に流行の勢ひを高め小袖、袷、單衣等に通じて貴族的に持囃さるゝは夫のお召縮緬の紋織にして、目下の時季に適當する縞柄は矢筈、珍鱗、斜柳、木賊、重鱗、大小あられ、角通し、割山椒ふじき等にして少しく派手なるものに至りては矢絣、重絣はすがすり楠玉、矢筈絣に重れ紅葉、はす算盤、斜矢がすり、蔦等、而して流行の地色はお納戸五分の勢力ありて其餘は淡れづみ、鐵いろ、紺鐵等なり、次の地質はお召の縞物にして肉色、うす鼠、梅鼠、藍鐵色の木賊縞、微塵、萬筋、千筋の細かき所頗る流行の旨に適ふが如し、中縞に至りては紫のはなれ矢絣、素れづみの牛蒡縞、皮鐵のかはり、亂立、同色の大隆廮、銀ねづみの立かすり、同色の矢絣、紺地の子持、其他革色、肉色地のかはり飛白等。以上の下着は紋鹽精を櫻鼠、藤色、肉色、千歲茶、裏葉柳、素鼠、藍ねづみ、貴族鼠の中に染めて重ぬるものを上乘の扮裝とし次に上着と同樣の柄を重ぬるか、或は地質を等しくして少しく華美

なる柄を重ぬるは意氣の嗜好と知るべし、他は更紗縮緬の胴拔なるが、其胴に用ゆべき絹は、鼠紫、淺黄、紅、白等の絞り形を一とすれど、又鼠絹をつけ合はすも淡泊にして面白かるべし、其襦袢は無論縮緬にして色は壁鼠、貴族鼠、藍鼠、肉色、さくら鼠、紅かけ等第一等の位置を占む。(市樂織を着する婦人を見受くれど、これは流行の外と知り玉へ)

(中)　上州產のお召縮緬か、八王子製の糸織を以て先づは中等の位地中最も高位地を占むるものなり、其地色及柄合は前記と大差なきも、寧ろ品によりては面白き柄合を見受くること數々之あり、かゝる上着を着する婦人に下着は餘り見うけ申さゞれど、下着の如何を記さゞれば何か物足らぬ心地ぞせらる、故に玆に其流行を案內すれば、こまかき形の七子、浮織、又は更紗奉書を第一とし、次は新糸織のかはり縞を胴拔にするも宜しかるべし

(下)　着して丈夫且淡泊なるは夫の秩父縞なり、次は銘線縞、節糸織等の淡いろを好み、派手なるは縞八丈、秋田八丈の餘り黄色を帶びざる中縞にして、又米琉球の絣を着する人亦多し、他は瓦斯糸の結城の珍柄頗る好評。

惣じて袷のフキには裾の破損を防がんため眞綿を少しく引くが故に随てフキも厚味三分位なるを上乘とす、而して袖口は唐繻子を最乘とすれど之は油氣多きゆゑ表地の汚損を導くの患あれば其代用品として小柳繻子大に行はる、次は南京繻子、織姬繻子なり。

男の袷

男子物(上)　何人にても向き且つ好まるゝは例の市樂なり、絢糸織之に亞ぎ、つなぎ糸織亦趣味多かり、其柄合は銀鼠の微塵、萬筋、千筋、はけ目、くづし等とし、次は以上の柄合に地色を異にせるもの、即ち白茶肉色、藍鼠等最も行はるゝが如し而して鼠地に白のさつま筋近來流行の度を高めつゝあるは、意氣を好むの人多き故歟、次に淡泊なるは、大島紬にして花かすり最も行はるゝも十の字の厭味なきに及ぶものあらじ、下着は婦人と異りて上着と同地質を撰ぶ、裏は中花色絹第一位を占め、花色之に亞ぐ淡花に至りては其趣意氣に流るゝ故にや餘り見受られず。

(中)　糸織にして紺地に鼠の大名萬筋を以て止めを刺せり、中等品にして一寸上等品にまがふものは、山市樂織にして、一見上市樂と優劣なきの品なり、若し地味にして且つ丈夫なるを好むは、夫の結城紬に如くものなし、此品近來大に地質を精撰して人意に投ずるは嘉ずべし、次は節糸の上等なるは相變らず世上の評判宜し。

(下)　秩父縞を第一とし、銘線之に亞ぐ、木綿物にて流行を極むるは、瓦斯双子及瓦斯結城とす、即ち前者は東京人士の嗜好に適し、後者は田舍人士の意を迎ふが如し、裏は羽二重金巾に限れる如くなるも又た花色「キヤラコ」も價廉なれば之を用ゆる人も多きやうなり。

概してフキの厚味は二分とし、袖口は言ふまでもなく黑八丈なり、勿論裾に少しく眞綿を引くは玆に言ふまでもなし。

流行の帶

男女の帶　これから袷の時季なると共に帶の時代となりぬ、殊に婦人は

羽織脱捨の衣裝なれば帶の美觀は申すに及ばず、扱其の流行は左の如し。

婦人用には勿論繻珍なるは讀者の能くしろし召す所なればくだくだしく言はず、其柄合も色々あれど概して紅葉、菊、牡丹三種に限るが如き傾向あり、其色合はお納戸地三分、黒二分、淡鼠三分、皮色二分の割合ならんか、腹合帶に至りては黒の片側に繻珍を合せしもの覇權を握り、片側博多に至りては寧ろ年若き婦人に多く見受けらる男子中は紋織博多第一等の流行、其他色の淡きは本場筑前にして濃きは八王子ならんか併し何れも甲乙なく世間に擴まりぬ、其他は黒無地に白の一本或は二本獨鈷、お納戸紺の獻上の流行伯仲の中の間にあり、若し質素を選まば紺地、黒地、鶯色地に白茶肉色の微塵くづし等ならん。

流行吳服物の價格

御召紋織	十圓乃至十二圓半	仝縞物	六圓半乃至九圓
市樂織	八圓乃至十二圓	仝上等	十三圓乃至二十圓
山市樂織	六圓乃至七圓半	緊糸織	八圓乃至十三圓
諸糸織	十二圓乃至十五圓	仝上等	十五圓乃至廿五圓
糸織縞	六圓半乃至八圓	山糸織	三圓半乃至六圓
節糸織	三圓乃至五圓	仝上等	六圓乃至七圓半
銘仙縞	三圓乃至四圓半	結城紬	五圓半乃至六圓
仝上等	六圓半乃至八圓	大島紬	八圓乃至十一圓
縞紬絣	五圓乃至七圓半	米琉球	二圓半乃至四圓
秩父縞	三圓乃至三圓半	繻珍廣帯	八圓乃至十五圓
仝中等	十八圓乃至廿五圓	仝上等	三十圓乃至五十圓
仝片側	三圓半乃至六圓	博多片側	三圓乃至四圓半
仝男帯	三圓乃至五圓	仝上等	六圓乃至十圓
繻珍男帯	五圓半乃至八圓	紺裏地（一疋）	四圓乃至八圓
羽二重金巾	四十錢乃至一圓	瓦斯二子	一圓半乃至二圓七十錢
瓦斯結城	一圓廿錢乃至二圓		

坂地の流行品

讀者の參考に資せんと、彼地新聞に出でし大坂の流行品を掲げつ、讀者東西の流行を比較せらるゝも興あるべし。

一も戰捷二も戰捷、何でも漢でも戰捷といふ字が附れば賣行が惡く中にも人の目に着は錦畫に石版畫、開戰前に比して二三割も騰貴したは陸海軍人の眞寫取分け伊東、大山、大島の各將官を始め兵士原田重吉などの中身賣行き宜く陸海軍激戰の友仙染は婦人の胴着羽織の裏小兒の衣服などに用ゆるもの多く、將軍、勝軍、凱歌、大勝などの號は酒の銘となつて世人に知られ煎餅に分捕生捕あれば饅頭に勝軍あり、帝國萬歲餅に勝利餅、全勝大勝と染出した手拭あれば中カチーフあり商店にしなは大貝などゝ洒落たるも多くチヤンくの切出し飴は支那人の首が飴の中から飛出し覗き機關には成歡牙山より旅順威海衛の陷落までを見せ落語に仁和加に見せ物何れも戰爭を當込で客の人氣を惹き遊廓では兵站部彈藥樂隊軍艦などの新符牒を用ゐ藥舖の廣告は豚兵を疫神に見立て藥壜から大砲打出してゐる所を畫き烟草屋の板看にはチヤンくを烟の中から吹出させ料理屋に戰捷祝賀會あれば遊廓に勝利酒酌むもあり婦人の髷形にも勝髷形といふもの流行し湯屋の雜談髮結床の取沙汰いづれも戰爭ならざるなく頑是なき小兒等すら竹細工のサアベル持て其所此所に戰爭事をなし神社佛閣の祭日にも海陸戰捷の紙幟を販ぎ婦女子を客

の雛棚さへ五人囃しに代ろに軍樂隊を以てするほどなれば來る五月の武者人形も日將が清兵を捕ふる形を作りゐるさ、相撲興行に國旗を掲ぐるはその謂なきに非れど風呂屋の暖簾に軍旗を用ゐし家あるは如何なるものか

日用品物價（四月六日）

◉白米小賣（壹圓につき）一等白米七升七合●二等白米七升九合●三等白米八升三合●四等白米八升七合●五等白米九升一合

◉雜穀（一圓に付）本場大麥二斗八升●脇場大麥二斗九升●肥後小麥一斗九升八合●下總小麥二斗一升●地廻裸麥二斗二升●上等竹林麥一斗四升五合●中等竹林麥一斗六升●下等竹林麥一斗七升五合●上等割麥一斗五升八合●同中等一斗七升五合●同下等一斗九升●常陸稗五斗●山稗四斗五升諸品とも花見相場不活潑なり大小豆は弗々必需口へ小取引あり

◉鷄卵（千個に付）●本メ十四匁十三圓四十錢より十三圓五十錢●天切名目十四匁廻り十三圓より十二圓八十錢●大玉本メ十二匁十一圓五十錢より十一圓四十錢●同名目十二匁廻十一圓より十圓二十錢●中玉上九圓七八十錢並九圓より九圓二十錢●並玉上八圓七八十錢下八圓二三十錢●上海玉（一函に付）品切

雜錄

海の樂

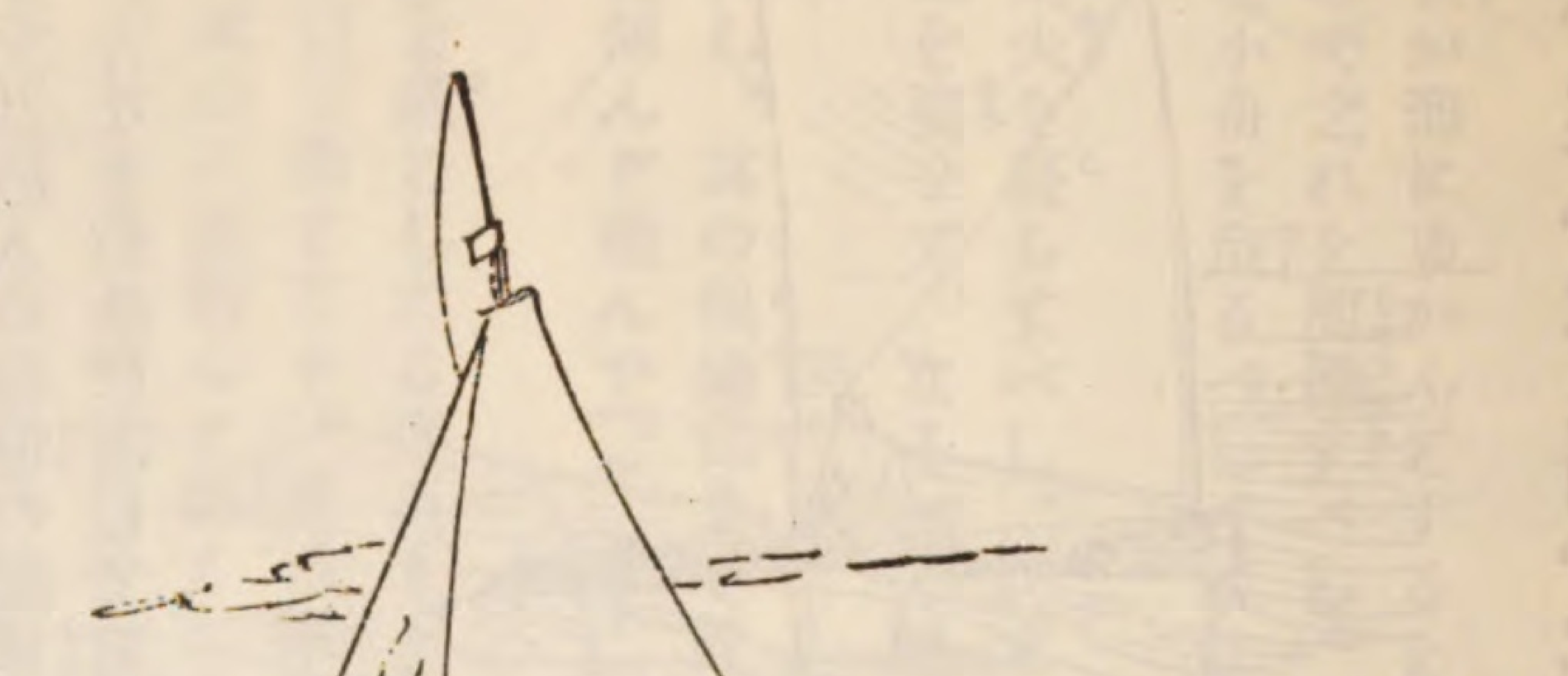
國木田哲夫

余昨年の十月より軍艦に乘りて從軍し、今年の三月まで海上の生活をなしたり。此間常に深く感じたるもは、吾國今日の人民は、一般に海事の智識極めて少なき事なり。何故に海事の智識少なきやといふに、海の樂を十分知らざるを以てなり。故に今日吾國の家庭には、海に付ての壯快なる談話を聞くも能はず今の少年は甚だ不幸と云はざるを得ず。今日家庭にて催さるゝ海の樂といへば、春の彌生の汐干狩位のものに過ぎず。されど之れは海の樂といはんよりは寧ろ磯の樂に屬す。其の遊びは優美なれども決して壯快のものとは言ひ難し。然るに海の樂の本色は優美よりも壯快にあり。

然らば如何なるを海の樂ぞと問ふに、海の樂とは則ち船の樂なり。」

元來『船』とは其れ自身已に詩なり畫なり小說なり歷史なりと言ふを得。『ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしぞ思ふ』一帆遙かに海霧のうちに出沒す、思ひ遠く情哀し。實に船ほど味あるものはなし。『萬里の風雪壯圖を起す』の句も舷を敲いて始めて歌ふ可き句なり。一々玆には擧げ難きも、若し眼を閉ぢて船に

付ける聯想をよび起し來れば、涙もこぼるゝなり、血も沸きあがるなり、拳も固くなるなり。心は何時しか地のはて世界のはてにまで及び、思ひは何時しか遠き古の時代に及ぶ。或は南洋土蠻の操つる丸木船を思ひ、或は英國人の乘り廻はす甲鐵艦を思ふ。詩人にも商人にも政治家にも軍人にも等しく味あるものは船なり。此の船に付ての樂が吾國今日の家庭に極めて乏しきなり。則ち船の樂を知らざるは海の樂を知らざるなり、海事の智識の乏しきは則ち船に付ての智識の乏しきなり。之れ實に吾國目下の家庭の欠點なりとす。

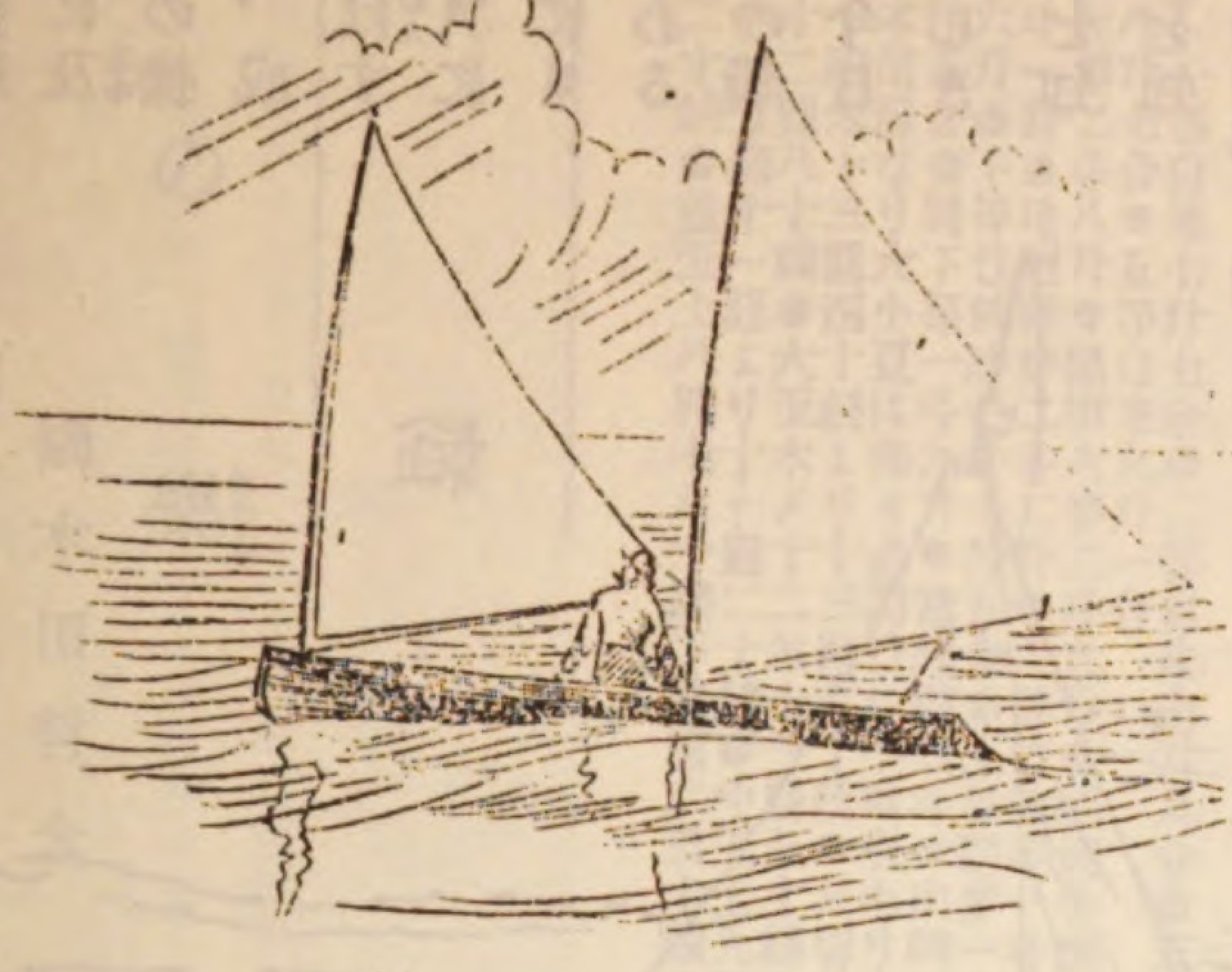


余が軍艦に乘れる間、樣々の話を聞り、今日まで聞かざりし珍らしき話を聞けり。其内に尤も余が感じたる話の一つは日本軍艦が海軍兵學校の生徒を乘せて「遠洋航海」に出でたる一度、軍艦濠洲のシドニーに着するや、恰も夕陽海港に充つ。白帆風を孕みて斜に快走するヤもの多くは之れ『ヤット』なり船中乘る處のトもの多くは之れ一家族なり、主人舵をとり其細君傍にあり、子女傍に坐す。帆を巧に操つりて右轉左回、彼方一に走り此方に馳す、其の狀如何にも樂しげなり。吾軍艦の入港するを見るや、細君子女皆な立て白きハンケチを振り、海上遠來の客を歡迎す。世に之れ程羨ましき事はあらざりし。と之れは某士官の實話なり。

然るに翻りて品川沖に至れば、堂々たる帝都の海上、船を浮べて一家團欒の樂をとるなど影だも見る可からず。之れ皆な凡て今日まで吾國人の習慣の結果ゆへ致し方なしとするも、致し方なきが故に決して喜ぶ可き事には非ず。」

英國人が海上王の稱あるは蓋し其の源因や遠し。決して一朝一夕の故には非じ。而して其の源因の重なるはかの國の人民上下押しなべて海の樂を知ばなるべし、已に海の樂を知る、則ち海事の知識自から多からざる可からず、海事の知識多きは以て彼國人民が海上に力を振ふ所以に非ざる乎。

吾國を守るも船なり、吾が國威を世界に輝かすも船なり、吾國の商業を盛ならしむるも船なり吾國が島國なる限りは船とは其の縁を絶つ能はざるなり。

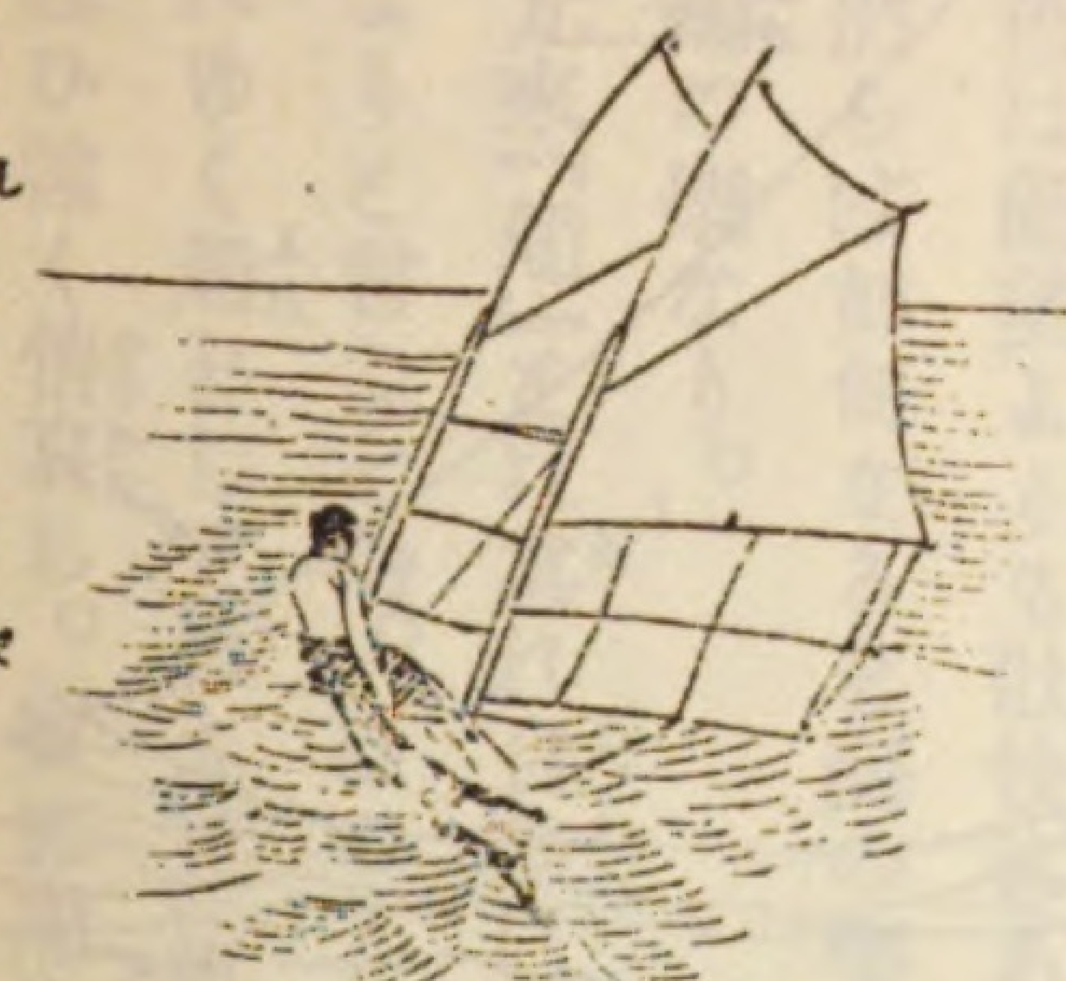


其二

吾が國の海岸線實に七千〇二十九餘里若し海に縁多き國民を世界に求めんか、吾國人民の如きは、最初に位すべきものといふ可し。然るに吾國今日までの習慣の結果は遂に吾が家庭をして海の樂より遠からしめたるは殘念此上もなき事也。

海には壯大なる風景ありて精神を養に足と同時に酸素充〳〵て人の健康を養に足る。故に海の樂を家庭の樂となし得に至ば、吾國の家庭の幸福必ず幾倍すべき也」

汐干狩も無きにはまさる去ど前にも言へる如く寧ろ之れは婦女子の慰に屬し、海濱の樂に屬す。又た近頃海水浴の流行やゝ盛なれども之れも亦た寧ろ海濱磯ばたの樂といはざる可からず。



其三

寧ろ如かんや一歩を進めて波上に乘り出さんには、輕舟を波と風とに任かせて島より島に江より灣に、思ひのまゝに馳せ廻はらんには。長汀曲浦の夕陽を海上三

哩の沖に眺むるも可なり。已に之れ世界の公道なり、西にゆくも可、東に走るも可、以て米國に渡るべし、以て南洋に航すべし。天高く波濶ほし。情は清よく氣は壯なる可し。

第一　父母は決して子女が海にゆかんとするを止む可からず、寧ろ自から進んで之れを獎勵すべし。

第二　無益の費を節して小舟を造るべし、或は數家協同して一艘を造るも可、

第三　船の形は自から工夫を凝らすべし、必ずしも在來の日本形の小舟に從ふを要せず。なるべく帆走に便に工夫すべし。

近來自轉車の流行を來たし、其の倶樂部まで置かるゝに至りたり。都會の紳士何んぞ進んで『ヤット』倶樂部を起さゞる。

余嘗て西國の海濱に一夏を過ごしたる事あり。余が寄寓したる家は朝鮮貿易を以て業となす。其の家屋海上に突き出で汐滿つる時は家の三面殆んど海となる一子あり當時僅かに五才計り、父此の兒のために一小舟を造り自から兒と共に乘りて、漕ぎ遊ぶを見たり。余は吾國到る處海濱に家をなす者、皆な此の如くならんとを望む者なり

塩原多助

（口繪の繪解き）

昔より東洋にても西洋にても、勤儉の德を以て身を立て家を起し、人尠からざれど、我日本人の傳記中にて鹽原多助、越後傳吉の如き人物は、蓋し有數なり、鹽原多助は如何なる勤儉によりて、本所に不相應しきものは津輕大名に鹽原多助とうたはるゝまでに身を立て名を顯はせしか。

彼は上州の片田舍の農家に生長じ、稍成人するに至るまで言ふに言はれぬ艱難辛苦を甞め其家庭にすら安居する能はず、終に江戸に出でゝ立身の道を開かんと、懷中無一錢にして故郷を離れ、轗軻落魄志を得ずして水に投じて死を決するまでに至りぬ。

然れども天幸に此の有爲の青年を捨てず、眼識ある神田佐久間町炭屋主人某に拾はれ、其家の奉行人に住み込み、必死となりて勉强至らざる所なく、屑炭を積み貯へ、或は敗鞋を拾ひ貯へ、之を補修して不時の準備としたるが如き其の勤勉勞力、常人の學ぶべからざるものありけり。

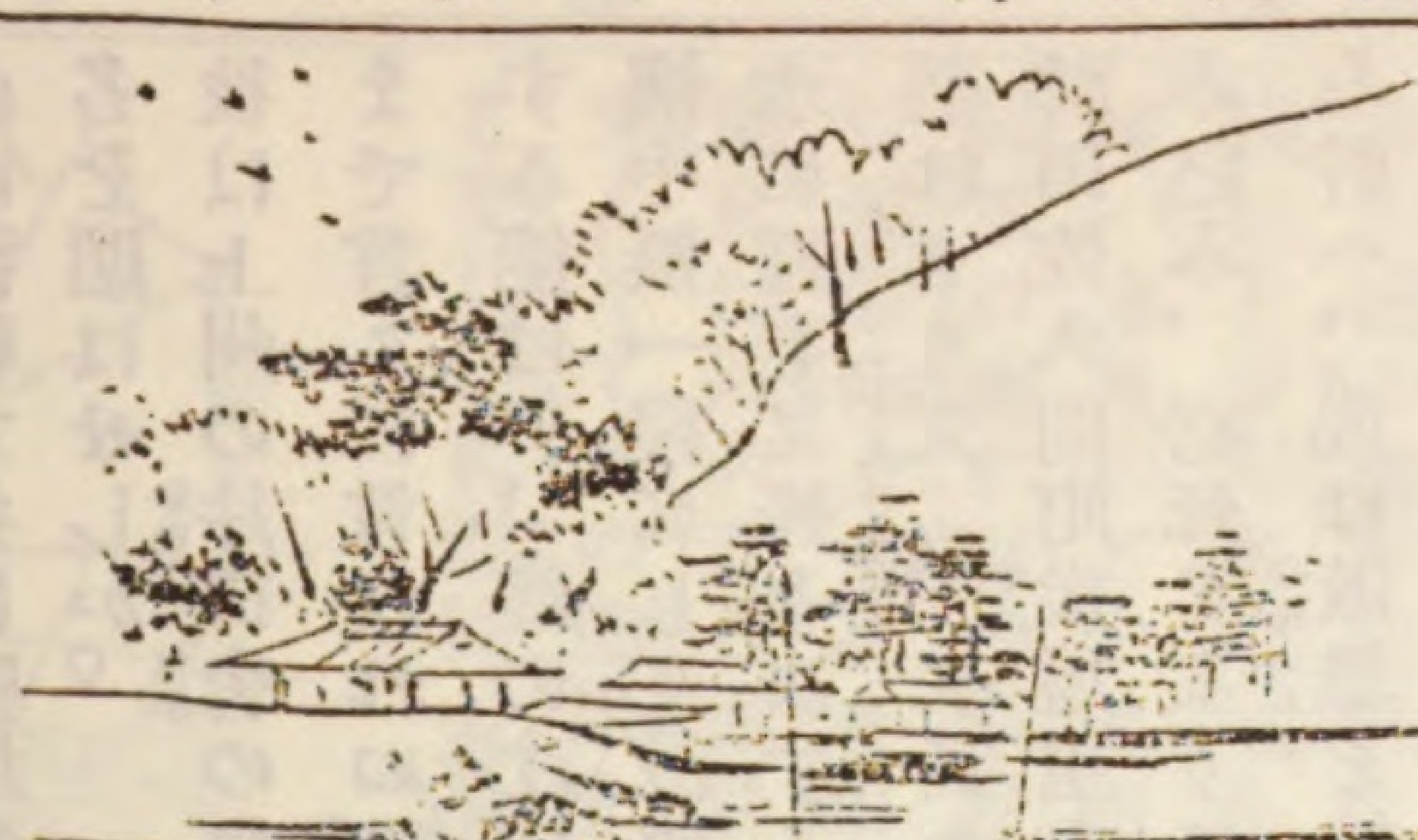
殊に多助の傳記中に目に立しは、彼が一生の和樂を結びたる結婚にてありき、多助、主人の媒介によりて眞家の處女某を娶り、結婚の式を擧ぐるの夜、賓客座に在り新郎新婦相對し、三々九度の祝盃正に酣なる時、宛も荷主より輸りし荷船河岸に着きぬ、多助少しも躊躇せず、矢庭に祝宴の席より立ち上り、肩衣をはらひ袴の裾を高からげて、直ちに走りて荷場にかゝりければ新婦某も振袖を鋏にて斷ち去り、共に荷揚を終りきとなん、ア、實にこれ千古の美談ならずや。

多助は勤儉力行を以て商賣の秘訣とし、勤儉力行を以て家庭の風儀と爲し、大江戸に身を立て名を擧げて其初一念を貫きぬ、商人に限らず凡ての人多助夫婦の行を鑑みざるべけんや。

時事一斑

春の行樂

春風駘蕩櫻花絢爛、實に花見の好時節なり、徒に花の形容は略しつ、茲に都下花の各所を揚ぐれば上野公園、淺草公園、九段靖國神社、牛ヶ淵公園、麴町山王社星ヶ岡、向島長堤、品川御殿山、深川公園、芝公園、愛宕山、谷中天王寺邊、



櫻花絢爛

若し遠乘して八代將軍吉宗が墨堤の櫻と同時に植えし小金井の櫻花を見んとならば汽車の便をかりて一驅すべし、甲武鐵道會社は去六日か飯田町、國分寺間に觀櫻臨時列車を發し下等に限りて三割引の往復切手を賣出すと云ふ尙臨時發車の回數は通常列車十二回往復の外八回往復にて飯田町發時間は午前七時、同九時五十五分、午後十二時四十九分、三時四十八分、又飯田町、國分寺間の走車時間は一時十分間。

時下最も摘草の候に適す、小兒少女の手を携へて青麥黃菜の田圃を漫歩し、菫、蒲英公、土筆、蓮花草なんどを摘みて歸り玉へや。

釣漁、船遊これからそろ／＼面白し、『春の水に肥たる鯉や鮒、鱗を張て淵に跳梁跋扈す行きて捕へ玉へや。

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行